

ウルトラマン&メカゴ ジラ～光の巨人と銀の 巨龍～

ユウキ003

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある一人の青年が、子供を守つて死んだら神様が現れて、
転生する事になつた。青年は糺余曲折の後にウルトラマンティガの
世界に転生する事に。多数の特典と共に青年はティガの世界で、
3式機龍を駆りながら仲間たちと共に戦うのだった。

※とある方からのリクエストにより始まりましたこの作品。

頑張つて行く次第ですので、なにとぞよろしくお願ひします。

私のメンタルが豆腐なため、批判的なコメントはダメージが
大きいため無理ですが、評価の方はどうぞじやんじやんやつちやつて

トマス。

目次

プロローグ 1 「終わりと始まり」	1
エピローグ 2 「僕の始まり」	—
エピソード 0 「始まりの日」	—
エピソード 1 「光と闇の始まり」	14 8
エピソード 2 『その巨人の名は——』	27
エピソード 3 『魔人襲来』	—
エピソード 3・5 『戦え機龍』	—
エピソード 4 『天秤』	—
エピソード 5 怪獣V.S 戦略	—
193 163 131 92	63

プロローグ1 「終わりと始まり」

唐突だが、高校生の俺はある日子供庇つて死にました。いや、比喩でも暗喩でもなく本当に死にました。

俺は、はつきり言つて普通です。運動も勉強も中の中。友達も多くなく少なくなく。所謂、平凡。平凡が人の皮を被つたような人間だった。まあ、アニメで言う所のモブみたいなキャラだつたつてわけだ。

まあ唯一つ、俺が常人より知識がある事と言えば……。

そう！それはずばり『特撮』！

何を隠そう俺は特撮オタクだ！ゴジラから始まるウルトラマンや仮面ライダー、スーパー戦隊と言つた日本を代表する特撮の大ファンだ！戦うヒーローに憧れる男子の一人だつた！

皆さんにはご存知だろうか！スーパー戦隊シリーズは、実はアメリカなどでパワー・レンジャーと言うリメイク版となり莫大な人気を得ている事を！流石特撮！

つと、話しが逸れてしまつた。

そんな特撮オタクだった俺はある日、普通に学校から家に向かつて帰つていた。

そして、横断歩道を人の波に続いて渡つていた時、酔っ払い運転のトラックが突つ込んできた。瞬く間に人々はパニックになり、渡る人の多かつた横断歩道上はカオスになつた。

そんな中で俺は、逃げる中で倒れそうになつた子供を救うためにその子の尻を全力で押した。代わりに態勢を崩した俺がその場に倒れ、突つ込んできたトラックに撥ねられた。

それが俺の最期の顛末だつた。

そして今俺の目の前には……。

神「……」

俺「……」

何か知らんけど神様が居た。

俺「か、神様つてホントに居たんだな。キリスト教信者が聞いたら泣いて喜びそうだ」

と、苦笑交じりにそう言うと……。

神「早速じやが本題に入らせてもらうぞい。お主の事は色々見させてもらつた。子供を助けようとして死んだという事実をな。そこで、お主の活躍を見込んであと一回だけ次の人生を歩ませてやろう」

俺「な、成程。つまり、ありがちな転生パターンと」

神「ありがちと言うでないわい！……お主の転生先はどこが良い？」

何ならお主の大好きな特撮の世界にしても良いぞい？」
それを聞いた俺は、一瞬思考が追い付かなかつた。

俺「は？ 特撮の、世界？……つてちよちよちよつ!?」

え！？嘘！俺特撮の世界に行けんの？！」

神「当たり前じや。そもそも世界とは数で表現できんほど無数にある。
お前さん達が特撮として見て来た世界が、現実と言う世界もあるのじやよ」

俺「ま、マジかよ！ ジやあ、ウルトラマンも、仮面ライダーも、
スーパー戦隊も、そしてあのゴジラの世界も実在している
つてのか！ やべ～！ テンション上がつてきた～！」

で？で？俺はそのどれに転生しても良いのか！？」

神 「あ、ああまあ、その通りじや」

俺 「よつしやあ！……あくでもどこにしよう。

仮面ライダーとかつて作品を一括りにしたつて色々あるし、どれかつても選べないし。あくもう

悩むく！」

神 「ハア。そんなヘタレなお主にはこれが良いわい」と言うと、いきなりルーレットをどつかから召喚してまわしだす神さま。

そして、そのルーレットが止まつて指さした世界と言うのが……。「ふむ。『ウルトラマンティガの世界』か。どうじや？ 候補が決まらんのならこれで」

俺 「ティガの世界か。おつしやあつ！ 良いぜ神様！」

俺 「俺をそこに転生させてくれ！」

神 「まあまあそう急ぐでない。転生に当たつて3つ程特典を

つけてやろう。何が良いか申してみよ」

俺 「え？ 特典？ うくん。特典かく。……あ！ じやあティガなら

5 プロローグ1 「終わりと始まり」

組織がGUTSだから、俺がそこには入れて、GUTSが3式機龍を作るようにしてくれよ！それがあれば俺もティガと一緒に戦えるからな！理由は何でもいいからさ！」

神「理由じゃと？」

俺「だつてさういきなり何の脈略も無く3式機龍があつたら可笑しいだろ!?」

神「そ、そうじやの〜」

『こやつ、妙に設定に拘るタイプじゃな』

俺「まあそれが一つ目として、容姿が綺麗めなのと、そこそこ運動と勉強が出来る体ならそれでいいかな」

神「それが二つ目じやな。で、残りはどうするのじや？」

俺「ううん。あ、折角だから俺の記憶を封印してくれよ」

神「封印？どういう意味じや？」

俺「俺はウルトラマンティガを全話見てる。ストーリーも大体

頭に入ってる。けど、このままティガの世界に転生したつて流れを全部知つてたら楽しみも半減つてもんだけ？

だから俺の記憶を封印、いや、消去してくれ」

神「本当に、良いのじやな？」

俺「まあ、ウルトラマンとか仮面ライダー、スーパー戦隊の事を忘れちまうのに後悔が無いつていや嘘になるけど、どうせそれとかが無い世界に行くんだ。

無いものの記憶を持つてつたつて、意味ないだろ?」

神「わかった。お主の願いを聞き届けよう」

と言うと、神様はどつからか杖を取り出して掲げた。杖の先端が光を放つて、俺の目の前の光の池みたいなもんを作り出した。

「それが転生の為の穴。『リンカーネイション・ホール』じゃ。

そのホールの出口を抜けた瞬間、お主は新たなる旅に出る」

俺「そつかあ!うし!だつたら早速行くぜ!」

そう言うと、俺は穴に飛び込んだ。

「神様の爺さん!ありがとな〜〜!」

俺は、そうやって穴の中から叫んだ。

ハハ!まさか異世界に行ける日が来るなんてな!やつてやるぜ!

そして、その青年が転生しホールが消えると、神様は……。

神「さてはて、お主はどんな物語を描くのかのう。

7 プロローグ1 「終わりと始まり」

しつかりやるんじやぞ」

神もまた、新たな生を受けた青年にエールを送るのだった。

プロローグ
E N D

プロローグ2 『僕の始まり』

～～前回までのあらすじ～～

子供を守つて死んだ学生の一人が神様によつてウルトラマンティガの世界に、様々な特典と共に転生する事になつた。

どうも、はじめまして。僕は『シアン』と言います。今僕は、

GUTS、Global·Unlimited·Task·Squad（世界規模で

無制限に仕事をするチーム）

と言う組織に所属しています。

GUTSとは地球平和連合、略してTPC直属の特別捜査チームで、主に世界各地の超常現象を調査する非武装組織です。

さてさて、それが今の僕ですが、そんな僕や仲間たちの物語が始まる前に、ちよつとだけ僕の経歴をお教えておきます。

僕の父親は、そんなGUTSとTPCが生まれる前まで存在していた防衛軍の下士官でした。日本で士官として働いていた父。

そんな父がある日出会ったのが、僕のお母さんとなるハーフの女性でした。
そう、僕はクオーターなのです。

ちなみに僕は周りから絶対女だろ、と言われる程、男らしくありません。
髪の色がお母さんやそのお母さんたちから受け継いだせいか、髪色は
外国人でも珍しい水色。ちょっとあつちこつちに跳ねる癖つ毛でも
あり、女の子っぽいから一度は本気で髪を黒く染めようとしたら
周りから、

『シャンちゃんが髪を染めたら私たち悲しくて死んじゃうから!』

なんて女友達の子に言われてしまい、結局染めずに今もそのまま
水色の髪をしています。

加えて僕は童顔+女顔なために周りから性格な年齢を当てられる事も
稀です。

小学校では女子たちの着せ替え人形みたいにされ、中学ではその
ルツクスから美術部や写真部のモデルをやらされ、結局の所
モテているのか、それとも僕の容姿が物珍しいのか。
まあ、今となつてはわかりませんが。

とまあそんな『男の娘』な僕がGUTSに入隊しようとしたのはある日の

父の一言でした。その日、僕は父に、強くなるにはどうしたらいいの?と、聞いたのです。そして、帰ってきた言葉が……。

『何でも良い。強くなれ。勉強でも、運動でも、何でも良い。

どんな時でも諦めずに頑張つて頑張つて、最後まで

やり遂げた奴が、本当に強い奴なんだよ』

そんな父の言葉が、僕の原動力でした。その後僕は、すぐに目標を見つけたのです。そう、お父さんです。お父さんみたいな防衛軍の軍人になって、誰かを守れる位に強くなろうつて決めたのが、

ある意味GUTSに入隊する動機の元でした。

それからという物、お父さんやお母さん、周りの人からアドバイスを貰いながら僕は色々頑張った。勉強も運動もとにかく頑張った。

諦めそうになる度に、お父さんの言葉が蘇ってきて、たくさん頑張りました。

小学校を卒業して、中学に進んで陸上をやりながら3年間成績で学年上位をキープ。更に3年後。ライフル射撃の部活を行つている高校が偶々通える範囲にあつたので、入学。陸上の時に身に付いた僕個人の朝練も続けつつ、高校の部活と学業を両立させて自他ともに

認める努力家として更に3年間がんばりました。

そんなある日、お母さんと一緒に三者面談が行われた時の事でした。

シアン「TPC、ですか？」

先生「そう。実は少し前にシアンちゃん、んんっ！シアン君はビームライフル競技の大会で優勝をしてただろう？それがTPCの人の目に

に留まつたらしく、君に、GUTSに入隊しないかとの事だ」

今、さらつとシアンちゃんと呼ばれそうになつたのは置いといて……。

シアン「GUTS？」

と、僕が疑問符を浮かべると先生はパンフレットの様な物を取り出して僕に差し出した。

ちなみに、ビームライフルとはいっても某機動戦士の様な物ではなく、レーザーを専用の機器に向かつて撃つ物です。

銃規制が厳しい日本で生まれた射撃競技の一つです。
と、まあそんな豆知識は置いといて……。

先生「これがそうだ。中を呼んでみなさい」

シアン「はい。……地球各地で頻発している超常現象の調査解明及び

それらの被害を最小限に抑えるために活躍するTPCの中の

組織、それがGUTSである」

僕が声に出してパンフレットの内容を読み上げる中でそれを横から覗き込むお母さんと聞いている先生。

僕は、説明文を呼んで心が、ハートがドキドキするのを感じた。

良く分からぬ。でも、『未知への探求心』と言う男の子なら誰でも持つてゐるかもしれないその気持ちが僕をかき立てた。

それに、正直この時の僕は迷っていました。ずっとお父さんの背中を追つていたつもりだったけど、それは軍人と言う背中に、大雑把に憧れていただけだと、今更ながらに思い知らされたのです。

だから悩んでいました。僕がなりたいのは軍人？それとも警官？

と、悩んでいた時に提示されたのがこのGUTSへの誘いでした。

これぞ正しく天からの授け、などと大げさに言う気はありませんが。その時僕の背中を押してくれたのが……。

お母さん「シアン。あなたがやりたい事をやりなさい。それを私も、

お父さんも応援しているから」

微笑みながらそう言つてくれるお母さんの一言でした。
だからこそ僕は……。

シアン「先生。僕、行きます。GUTSに」

先生「良いのかい？」

シアン「はい。……お母さんが言つてくれたように、僕は僕のやりたい事を精一杯やつてみようと思います！」

こうして、僕はその場でGUTSに入隊する事を決意したのでした。

とまあ、そんなこんなで僕はその後、GUTSの正規隊員になるために

色々な訓練に参加して、晴れて2006年。僕はGUTSの一員になりました。
そして、そこからが僕たちの。僕と大切な仲間との、怪獣や宇宙人たちとの戦いの日々の始まりであり、そして……。

光の巨人、ウルトラマンティガと共に戦う物語の始まりでもありました。

プロローグ 第2話 END

エピソード0 『始まりの日』

～～前回までのあらすじ～～

転生を果たした男性は、これまでの記憶を捨て、新たな人間、『オオトリ・シアン』となつた。シアンは軍人の父を持つて生まれ、父に憧れ努力を続ける中でGUTSと言う組織への誘いを受けた。そして彼は自分のやりたい事をやるために、GUTSへと加わる事を選んだ。

僕がGUTSに誘われたのが高校卒業前だつた。それから2年の訓練期間を経て、僕は成人するとともに日本の房総半島沖に建造されたTPC極東本部基地でありGUTSの作戦司令室が置かれている基地、『ダイブハンガー』に配属になつた。

このダイブハンガーは通常、海中に待機していてライドメカ、つまりGUTSのメカが出動するときなどに海上に浮上するのです。そんなダイブハンガーで働いていた僕。これは、そんなある日のお話です。

朝。GUTSの制服に身を包んで司令室に向かいます。

と言つても、GUTSは超常現象を専門とするためはつきりと言つてしまふとやる事つてあんまり多くありません。

まあ、そんな毎日のように超常現象が起きてたら、地球なんてもう末期じゃないか！って思うのですが……。

と、そうこうしていると司令室に到着しました。

シアン「おはようございます」

ちよつと静かめですが挨拶をしてはいると中には数人の隊員、僕の同僚というか、仲間である皆がそろつっていました。

イルマ「あら、おはよう」

まず最初に僕に気付いたのは、GUTSの頼れる女性隊長である『イルマ・メグミ』隊長です。

ダイゴ「おはようシアン」

次は僕と同じ男性隊員で『マドカ・ダイゴ』隊員。僕の3つ上で先輩です。

シアン「おはようございます」

ホリイ「おはようシアンちゃん」

と、僕が挨拶をしていると、一人の男性隊員、関西人で開発などもやっている『ホリイ・マサミ』隊員が僕の事をシアンちゃんつて言つてきました。

シアン「ホリイさん。シアンちゃんはやめてください。これでも僕男なんですから」

と、困り気味に言う。実際、僕のあだ名として『シアンちゃん』なんて呼ばれる事がままあります。

僕、これでも男なのに。トホホ……。

シンジヨウ「そう言うお前も、女っぽい所に原因があるんじやないのか？」と、笑みを浮かべているのは男性隊員で部隊のエース、

隊員養成所の先輩に当たる『シンジヨウ・テツオ』隊員。

ヤズミ「オオトリ隊員つて、確かに男っぽくないよね」

と相槌を打つのはGUTS最年少の『ヤズミ・ジュン』隊員。
そこへ……。

ムナカタ「ほら。そう言うのは良いから手を動かせ」

そう言つてくれたのは隊の副長、『ムナカタ・セイイチ』副長。

レナ「そうよ。可哀そうじやない、気にしてるのに」

そう続けたのは、女性隊員で男勝りでも有名な『ヤナセ・レナ』隊員。
そして……。

アイナ「まあ、女の子っぽいのは否定しきれないけどね♪」
と続いたのがレナ隊員と同じ女性隊員の『ヤシロ・アイナ』隊員。
僕を含めたこの総勢9人が、現在のGUTSのメンバーです。
で、僕はまあその、俗にいういじられキャラでした。まあ別に
いじめられてるとかじやないんで大して気にして居ないんですが…。
成人してもこの童顔と女顔は相変わらずで、この前あつた同窓会
なんか、男らしくなつたねって言われるどころかもつと美人になつたねなんて言われて。

僕の男になるための道は、まだまだ険しそうです。
つと、ダメダメ。今は勤務中だ。仕事仕事つと。
と、そう思つていた時でした。

『PLLPLL!』

唐突に、僕とヤシロ隊員のPDI、通信端末が音と共に振動して
着信を知らせてくれた。

同タイミングで鳴った事もあり、僕とヤシロ隊員は一度視線を

合わせてから通信に出た。

シアン「はい。こちらオオトリです」

アイナ「ヤシロです」

僕たちが開いた端末の画面に映つていたのは、TPC科学局の博士でもある『カシムラ・レイコ』博士だった。

レイコ「おはよう二人とも。早速で悪いんだけど、二人とも私の開発室に来てくれないかしら？少し話したい事があるの」

シアン「はい、わかりました。イルマ隊長」

イルマ「わかつてるわ。行つて来なさい」

シア・アイ「失礼します」

そう言つて、僕とヤシロ隊員は隊長に敬礼をしてから司令室を後にしました。

ダイブハンガーの移動する事数分。僕とヤシロ隊員はレイコ博士の部屋へとやつてきました。

シア・アイ「失礼します」

レイコ「あら、いらっしゃい。待つてたわよ」

と、博士は僕たちに気付いてパソコンをタイプしていた指を止め

こちらに振り返つてから座つたまま近くのソファを指さした。

「悪いけど少し待つてもらえる？これすぐに終わらせるから」と言つてパソコンの方に向き直る博士。僕は仕方なく部屋の中を少し見回していたのだけど……。

シアン『ん？』

不意に、視界の隅で何かが動いたような気がして僕はそちらに目を向けた。そして僕が見たのは、部屋の隅の壁に埋め込まれた連絡用のディスプレイに、まるで泳ぐように黒い服の女の子が映つっていた所だつた。一瞬、理解が追い付かずにそちらを見つめてしまう僕。その時。

レイコ「ごめんなさいね、待たせちゃつて」

と言つて、僕とヤシロ隊員の座るソファとテーブルを挟んだ反対側のソファに腰かける博士の声に、僕は意識を戻して博士の方を向いた。そして、一瞬だけチラッとさつきのディスプレイに視線を向けたけど、そこには女の子の姿は無かつた。

シアン『気のせい？まいつか』

と思いつつ僕は博士との会話の方に意識を戻した。

レイコ「それじゃあ早速本題に入りましようか。あなた達を

呼んだのは、二人にテストしてもらいたいものがあるから
なのよ」

シアン「テスト？」

レイコ「ええ。口で説明するより、見てもらつた方が早いわね」
と言うと、博士は近くのデスクの上に置いてあつたタブレットを
取つてきて僕たちの前に置いた。

そして博士が画面をタップしたり操作すると、『それ』が画面に
映し出された。

それは、一言で言えば龍人だつた。どこかの格納庫らしき背景を
背にしている銀色の龍人。それを見て僕とヤシロ隊員は驚いていた。
思わず息をのむ僕と、絶句しているヤシロ隊員。

aina「博士、これは……」

レイコ「これは今現在TPCの未来科学センターを中心に開発が
進められている大型ロボットよ。未来科学センターの
若い局長さんが提唱した『災害救助用マルチプラットフォーム
開発計画』。まあようは災害救助用の新型ロボットの開発ね。
その開発計画によつて作られた3番目の機体。

『3式機龍』。それがそのロボットの名前よ』

シアン「3式、機龍」

僕は驚きながらも、その名前を口にした。

レイコ「最も、まだプラットフォーム、つまり素体としての機体が完成しただけなんだけどね」

アイナ「素体？あれがですか？」

レイコ「そ。これからさらに災害救助用の装備を開発して装備させるのが当面の計画なの」

シアン「それはわかりました。……ですがそれと僕たちに一体何の

関係が？」

レイコ「私があなた達に頼みたいのは、この3式機龍を操る試作機のテストよ。3式機龍には3か所のメンテナンスブースがあるわ。そこから機体の操縦も可能。でも機龍が全力で稼働する時、

ベースには殺人的な加速度、Gが加わるわ。だから3式機龍は緊急時以外は外部から操作するように設計されているの」

と言うと、指でタブレットの画面を横にずらす博士。そこに映っていたのは、白い戦闘機のような機体だった。

「TPCが開発した試作機よ。あなた達にやつて欲しいのは、
これの飛行テストよ。ここじゃあなたの達GUTSが
飛行経験一番豊富でしょ？だからあなた達にお願いしたの」

アイナ「成程。それは確かに一理ありますね。オオトリさんも
構いませんよね？」

シアン「はい。やらせて頂きます」

こうして、僕とヤシロ隊員はその試作機のテストパイロットを
引き受ける事になりました。

しかし、その日の内に事件が発生したのです。

それは、午後、夜の事でした。博士からテストに関する資料を貰い
司令室で僕とヤシロ隊員が打ち合わせをしていた時でした。周りでも
他の皆が訳あつて今日は遅くまで働いています。何でも不思議な
隕石が落ちて来たとからしいですが、詳しい事は、僕はまだ知りません。
そんな時でした。

イルマ「震源が、動いている？」

と、何処かと受話器で通信をしていたイルマ隊長の言葉に僕やヤシロ隊員を

始め、他のみんなが手を止めて隊長の方を向いた。

「はい。わかりました。すぐに出撃します」

と言うと、受話器を置く隊長。

震源が動いている？ どういう事だろうか？
と、僕が疑問に思つてゐると……。

「全員聞いて。今通信が入つたのだけど、西アジア支部のある
カトマンズからよ。通信の内容は、モンゴル平原付近で謎の

地震が発生したため我々に調査して欲しいとの事よ」

シアン 「先ほど、隊長は通信で進言が動いていると言つていきましたが」

イルマ 「ええ。中国とモンゴルの国境付近に埋設された地震の早期警戒の
ためのソナーが地震を感知。データを受け取つたカトマンズの
支部で解析が行われたけど、そのデータを解析してみると、

震源が動いているとしか言えないようよ」

シンジヨウ 「しかし、震源が動くってのはどういう事なんだ？」

ホリイ 「でつかいモグラでもおるんか。はたまたそれ以外の理由が
あるんか」

と、顎に手を当てて疑問符を浮かべるシンジヨウ隊員と同じく腕を

組んで首を傾げるホリイ隊員。

ムナカタ 「ともかく、ここで頭を捻つっていても始まらない。

ダイゴ隊員、レナ隊員」

ダイ・レナ 「はいっ！」

ムナカタ 「お前達はガツツウイング1号で現場に急行。何か動きが無いかを探ってくれ。ヤズミ隊員はカトマンズの支部に連絡して今あるデータを送つてもらうように伝えろ。そのデータを残つた俺達で精査して何か手がかりが無いか調べる」

ジユン 「了解っ！」

と、そこへ。

レイコ『ちょっと良いかしら？』

司令室の大型モニターにレイコ博士が映し出された。

シアン 「カシムラ博士？」

イルマ 「何か御用でしようか？」

疑問符を浮かべる僕と問い合わせ返すイルマ隊長。

レイコ『話は聞かせてもらつたわ。モンゴルへ調査に行くんでしょ？

だつたらこれも使つて』

と博士が言うと、画面が切り替わってそこにあの試作機が映し出された。

アイナ「これって例の試作機ですよね？なぜですか博士」

レイコ『この機体は3式機龍の第3の目の役割もあって多種多様な

レーダーや探知機を搭載しているの。こういった調査にはうつてつけのはずよ。テストも兼ねて初フライト。

どうかしら？』

博士の言葉に、僕やヤシロ隊員、ダイゴ隊員達の視線がイルマ隊長に集まる。

イルマ「……わかりました。オオトリ隊員、ヤシロ隊員。両名はこの試作機に搭乗しガツツウイング1号と共にモンゴルに向かつて頂戴」

シア・アイ「〔了解っ！〕」

そして、僕とヤシロ隊員、ダイゴ隊員とレナ隊員はそれぞれ分かれて格納庫に向かつた。その間に、発進の準備として海底に沈んでいたダイブハンガーが海上に浮上し姿を現した。

専用のヘルメットを被り、僕は試作機の後部シートへ。ヤシロ隊員は前部シートへと体を滑り込ませた。

シアン「システムチェック、オールグリーン。各計器異常なし。
エンジン出力正常。各部スラスターも異常なし。

ヤシロ隊員』

アイナ「了解。……試作機より管制塔。これより発進します」
オペレーター『了解。進路クリア。クリアードフオーランチ』

アイナ「試作機、発進！」

返事をするとともに、機体を発進させるヤシロ隊員。僕は
体にGが加わるのを感じながらダイブハンガーを飛び出していくのを
横目に見ていた。

そして、夜の空に飛び立つた僕とヤシロ隊員の試作機と、ダイゴ隊員と
レナ隊員のガツツウイニング1号がモンゴルへと向けて飛び立つた。

それが、これから始まる大いなる戦いの第一歩になると、誰も
知らぬまま。

エピソード0 END

エピソード1 『光と闇の始まり』

「前回までのあらすじ」

GUTSに配属となつたシアン。そこで彼は仲間たちと共に働いていた。そんなある日、シアンは同僚のアイナと共に、新型の大型ロボット、『3式機龍』を外部から操作するための試作機のテストを依頼された。しかし、そのすぐあと、謎の地震の発生が報告されたため、シアンはアイナと共に試作機に搭乗。同僚の『ダイゴ』、『レナ』が駆るガツツウイング1号と共にモンゴルを目指して基地から

夜明け前の空へと飛び出したのだつた。

その後、モンゴル平原に到着するガツツウイング1号と試作機。

シアン「こちら試作機、現場に到着しました。これより周囲の探索を開始します」

ヤズミ『了解。こちらでもカトマンズからのデータを精査していますが、何が起こるか分かりません。十分に注意してください』
シアン「了解。……と言つても」

ダイゴ『現場付近にこれと言つた異常は無し。穏やかな草原が広がつてゐる
くらいだね』

僕の言葉を先読みしたかのようなダイゴ隊員の言葉が通信機越しに
聞こえて来た。

『こちらの計器にはこれと言つた異常なデータは観測されてない。

試作機、そちらは?』

シアン「こちらも特に。これといつて——」

異常はありません。僕がそう言おうとしたその時。

『ビーツ！ビーツ！』

突如として計器から警報が鳴り響いた。

「いえ、待つてください！試作機の簡易対地レーダーが何かを
捉えました！……ツ！これは」

アイナ「どうしたの!?何が起こつてるの!？」

シアン「地面の下を何かが高速で動いてる……！そんな、これじゃ
まるで、生物の動き……!？」

あり得ない。それが僕の言いたい言葉だ。地中を動く『何か』を
試作機のレーダーが捉えた。

レナ『オオトリ隊員、他に、他に何かわかる事は!? その何かの大さとか、何でもいいから!』

通信機越しにその質問が来た時、僕の口の中は乾ききっていた。迷い、疑っていたからだ。自分の目を。

それでも、僕は何とか自分の目で見たデータを口にした。

シアン「ち、地中を移動する、ぶ、物体の大きさは、約、
60メートル、です」

僕がそう言つた時、通信機越しに他の3人の疑問符が漏れるのを聞いた。そうだろう。僕もみんなも、信じられる訳がない。

60メートルの巨大な生物が居る訳ない。

僕はそう信じていた。いや、信じたかつた。
けれど……。

『ビーッ！・ビーッ！』

再びの警告音に僕の意識は引き戻され、僕自身は頭を被り振つて気持ちを切り替えた。

アイナ「今度は何!?」

シアン「ち、地中の物体が浮上を開始！ 深度80、75、70。

このままだと地表に出現します！」

そう僕が叫んだ次の瞬間。

『ドゴオオオオオンッ！』

盛大な音と共に平原の一部が崩壊。そして、その崩壊によつて出来た穴の中から、体に付いた土を払い一つ『奴』が現れた。

アイナ「何、あれ」

現れた奴をヤシロ隊員と僕はただ茫然と見つめてしまつた。

シアン「バカでかい、怪物」

いや、違う。そうじやない。あれは、奴は……。

『怪獣』

かつての直立姿勢で描かれていた恐竜のような、どつしりとした体つきにぶつとい手足。鋭い牙。建物さえ薙ぎ払いそうな太い尻尾。怪獣と呼ぶにふさわしかつた。

と、その時、奴が歩みを進め近くにあつた集落に向かつて行つた。

アイナ「このままじゃあの村が！何か武器は」

と言つた言葉を聞いた僕はすぐにシステムを立ち上げた。

シアン「機体に緊急連絡用の閃光弾が3発搭載されています。これを奴の

顔にぶち込むんです。奴の目がどういう構造かは
わかりませんが、さつきまで地中の暗闇に居たのなら、
閃光で威嚇できるかもしません』

アイナ「そうね。レナさん！聞こえますか!?こちらは閃光弾で

奴の動きを止められるかやつてみます！」

レナ『こつちも信号弾で威嚇してみるわ！』

そう言うと、集落の上を旋回したガツツウイング1号が奴の足元に
黄色い煙を放つ信号弾を撃ち込み、そのまま奴の鼻先を掠める形で
上昇していった。

そして、それによつて奴の視線が上を向いた。今僕たちの試作機は、
ガツツウイングの辿つた軌道をほぼ同じ動きで続いていた。

狙うは文字通り奴の眼前！

シアン「ターゲットロック！今です！」

アイナ「閃光弾、発射！」

奴が上を見上げている隙を逃さず、ヤシロ隊員が操縦桿のスイッチを
押し込んだ。それによつて機首にあつたマルチランチャ一から閃光弾が
発射され、奴の眼前でさく裂し強烈な光を放つた。

奴はそれに驚くと、その場に蹲るような姿勢から地面を掘り進んでどこかへと去つて行つた。

「オオトリさん！あいつは！」

シアン「……ダメです。簡易レーダーの索敵不可能深度まで逃げられました。追尾不可能です」

そんな現実を、僕は申し訳なさそうにそう告げた。
一体、奴は何者なのか。この時の僕たちにはまだ、知る由も無かつた。
けれど、その疑問以上に僕は思つた事があつた。

『奴』は、一匹だけなのかな、と。

或いは、奴のような存在が他にも居ないのか？と。

そして結局、僕たちはすぐにとんぼ返りでダイブハンガーに帰還。
僕たち自信が目にした事と試作機に搭載されていたカメラで収めた映像を報告し提出した。

僕たち9人が見つめる大型スクリーンの中で、奴が吠える姿が映つていた。

シンジヨウ「一体全体、何なんだこいつは」

ホリイ「化けもん。としか言いようがないなあ」

ヤズミ「推定身長は60メートル越え。地球上でこれまで確認された生物の中でも群を抜いて巨大な生命体です」

戸惑うシンジヨウ隊員やホリイ隊員。何とか冷静に報告するヤズミ隊員。一応ムナカタ副長やイルマ隊長は冷静だけど、二人が驚いていない訳では無さそう。

まあ、かく言う僕も未だにあの驚きが抜けきらないのが現状です。
そんな時。

イルマ「ダイゴ隊員、レナ隊員、ヤシロ隊員、オオトリ隊員。

あなた達は自分の目でこの生物を見た訳だけど、この生物の
事をどう思う?」

ダイゴ「どうと言われましても。大きすぎて、正直夢でも見ていたん

じやないかつて気分で、未だに信じられません」

レナ「私も、ダイゴ隊員と同じです。正直、自分の目が信じられません
でした」

アイナ「見たのはほんの数十秒でしたから、どうと言われても狂暴なのか、
人間を襲おうとしたのか、何も分かりませんから、私から
言える事は無いと思います」

隊長の問いかけに答えるヤシロ隊員達。僕は……。

シアン「僕は……。恐怖を感じました。けど、改めて冷静に考えると、疑問も浮かんできました」

イルマ「疑問?」

僕の言葉を問い合わせ返す隊長。そう、疑問だ。それは……。

シアン「なぜ、奴は『今』現れたのか。過去にこれまであんな生物が存在していたなんて見た事も聞いた事もありませんでした。

そんな、今まで存在の噂すらなかつた生物が突如として

姿を現した。……何て言うか、僕の感なのですが……。

これって、何かの前触れなんじやないかなつて思つて」

レナ「前触れ?」

ムナカタ「前触れか。……不吉な予感ほど、当たつて欲しくないが

当たるんだよな」

と、副長は僅かにぼやいていた。確かに、こんな予感は僕だつて当たつて欲しくはない。けれど……。

そう思つていた時だった。

レイコ『イルマ隊長』

さつきまであの怪獣が映っていたスクリーンが切り替わって
カシムラ博士が映し出された。

『例の未確認生物の件で忙しい所悪いんだけど、

回収された隕石の解体の件いいかしら?』

イルマ「そうでした。お願ひします」

それから数分後。カシムラ博士と助手の人がGUTS司令部にやつてきた。
理由は先日落下した謎の隕石の分析と解体を僕たちが立ち会う事になつていたからだ。

アイナ「これが、変な隕石なんですか?」

レイコ「ええ。本来なら大気圏突入の摩擦熱で燃え尽きるはずなのに、

見事に大気圏を突破して地表に落ちた謎の隕石。

これがそうよ」

レナ「何か埋まつてゐみたい」

え? 埋まつてる? これに?

と、僕はレナ隊員の言葉に心の中で疑問符を浮かべた。

そしてレイコ博士がレーザーカッターで隕石の表面を削るが……。

レイコ「天然の隕石じゃない。作られた物よ」

ホリイ「ええっ!?」

博士の言葉に疑問符を浮かべるホリイ隊員。僕も驚きつつ隕石の方に歩み寄った。

天然じやないというのなら、人工物?まさか、宇宙人からのメッセージとか?

と僕個人で勝手に考えていると、隕石が真つ二つに割れて中から円錐形の物体が現れた。

それを司令室の中央テーブルに置いたその時。不意に司令室内の照明の光量が落ちた。

シャン「何これ?」

アイナ「発電機の電圧でも低下しているのかしら?」

僕とヤシロ隊員が呟いたその時。

『ピカッ!』

不意に円錐形の物体が光を放つた。それに気づいてみんな慌てて距離を取つた。

シャン「ひ、光つた……!」

すると、今度は円錐形の物体の一部が開き、空中に人の姿が投影された。

アイナ「これって、ホログラム?」

レイコ「ええ、そう見て間違いないでしようね」

突然の事で驚いていた僕たち。しかしその耳に、何かの声が聞こえて来た。

ホリイ「何か言うとるなあ」

シアン「はい。……でも英語でもないし、中国語やドイツ語、フランス語。どれとも違います。こんな言語、聞いた事ありません」

僕はGUTSとして各地で活躍できるように、色々な国の言語を初步程度だけ学んでいた。でも、そのどれとも違う言葉が聞こえて来た。

すると……。

ホリイ「サウンドトランスレーターで訳せるかもしけんでえ」

と言うと、司令室のオペレーター用のデスクとトランスレーターを使用し言語を訳すホリイ隊員。
そして……。

ユザレ『私は、地球星警備団の団長ユザレ』

ホログラムの言葉が、僕たちにもわかるように訳された。

その言葉に、僕たち9人とカシムラ博士は聞き入っていた。

『このタイムカプセルが地球に到着したという事は、地球上に

大異変が相次いで起きます。その兆しとして、大地を揺るがす

怪獣『ゴルザ』と、空を切り裂く怪獣『メルバ』が

復活します』

ゴルザに、メルバ。大地を揺るがす？まさか……。

ダイゴ「ゴルザだ！モンゴルに現れたのはゴルザって言うんだ！」

僕と同じ推測にたどり着いたダイゴ隊員がそう言っている。

正直、僕も同意見だ。

大地を揺るがすのがゴルザだというのなら、あの怪獣の見た目が何となく合つてしまふ。現に奴は大地を割つて現れた。

僕がそう考えていた間も、ユザレのホログラムはしゃべり続けた。ユザレ『大異変から地球を守れるのはティガの巨人だけです』

ティガ？確かに、インドネシア数字の3はそう発言していたような……。

『かつて地球上の守り神だった巨人は、戦いのために用いた体をティガのピラミッドに隠すと、本来の姿である光と

なつて星雲へ帰つて行きました。我が末裔たちよ。

巨人を蘇らせてゴルザとメルバを倒すのです』

光の、巨人。かつての守り神。……本当にそんな存在があるのだろうか？
僕自身、ゴルザの事は何となく信じられる。でも光の巨人なんて……。

『巨人を蘇らせる方法は唯一つ』

しかし、次の瞬間その方法を教えようとしたホログラムが歪んでいき
消滅してしまった。

それと同時に、暗くなつていた部屋の明かりが復活した。

イルマ「カシムラ博士、どうです？」

レイコ「太陽系の彗星を模したタイムカプセルね。」

悪戯にしては手が込んでるな！」

と言つて苦笑を浮かべる博士。すると……。

ダイゴ「本物ですよ！ゴルザが現れる事までぴったりと言い当てる」

ムナカタ「あれがゴルザとは限らん」

ダイゴ「その内メルバも！」

レイコ「ダイゴ隊員。このタイムカプセルを信じるつて事は過去に

私達より優れた科学力を持つ文明があつたと認める事なのよ？」

と言われると、俯いてしまうダイゴ隊員。

でも、僕も……。

シアン「ですが、だからと言つて真っ向から否定するのもどうかと思ひます」

ダイゴ「シアン」

シアン「例えば、ムー大陸やアトランティス大陸のような大陸の沈没説がその先史文明崩壊の名残だつたとしたら……」

レイコ「オオトリ隊員、それはオカルトの話?」

シアン「ですが!人間の力をもつてしても未だに未知の存在は多くあります。あの巨大な生物、怪獣を今まで我々が知らなかつたのが

良い例です。あの常識を破るような生物が居る今、

ある程度常識から外れて考へる事も必要かと思ひます」
僕は、僕の思ひ事を口にした。

結局その後、カシムラ博士とホリイ隊員が放射性元素による年代測定を行つた。結果は……。

レイコ「紀元前25万世紀から38万世紀にかけての地層で
出来てるわ」

え!?

シアン「に、25万世紀以上も前なんて、それじゃあ」

ホリイ「そ。およそ3000万年前。新生代第3紀漸新世」

アイナ「人類の祖先とされる猿人がアフリカに誕生したのが

およそ600万年前だから」

レイコ「単純計算でも人類の祖が生まれる2000万年以前の物よ。この隕石の欠片は」

驚く僕たちに説明してくれる博士やホリイ隊員。

確かに僕はあるのホログラムの言葉を信じない訳じやない。

でも、そんな大昔に人類が存在していたなんて……。
とてもじやないけど考えられない。

……悪戯?あのホログラムが?でも、誰が何のために?
と、僕がそつちの線を疑いだしたその時。

『ピーッ!ピーッ!ピーッ!』

不意に司令室内に警報が響き、大型モニターが切り替わった。
緊急の連絡が入つたんだ。相手はサンティアゴの南アメリカ支部だつた。
皆がモニターに駆け寄ると同時に、向こうのオペレーターの人の顔が

映し出された。

オペレーター『イースター島に怪獣が現れました！定点カメラの映像を送ります！』

次の瞬間、モニターが切り替わって映し出されたのは……。

『AAAAAAANN!!』

一言で言えば、鳥人。細長い首と翼にも刃にも見える鋭利な肩の
パートを持った怪物が夜のイースター島で山を崩しながら現れた。
そして、その怪物、いや、怪獣のおぞましい金切り声のような鳴き声が
僕たちの耳に届く。

誰もが驚いていたその時。

ダイゴ「メルバだ！……空を切り裂く怪獣メルバ」

真っ先にダイゴ隊員が叫んだ。

ムナカタ「なぜ今怪獣が？」

驚きながらも疑問符を浮かべるムナカタ副長の方に向き直るダイゴ隊員。

ダイゴ「地球上に異変が起こってるんです。ユザレが正しかった。

タイムカプセルは本物です。ゴルザが出た。メルバも！

後はティガの巨人だけなんです！」

ティガの巨人。確かにあのホログラム、ユザレの事が正しければ、その巨人を蘇らせる方が良いのかかもしれない。でも……。

イルマ「ティガの巨人？……ティガってどこなの？」

ダイゴ隊員の言葉にそう問い合わせる返すイルマ隊長。しかしこれには流石のダイゴ隊員も答えられなかつた。

シアン「ティガはインドネシア語で3を意味します。もしかすると、インドネシアかもしません」

アイナ「なら、ティガのピラミッドはインドネシアに？」

咄嗟に僕の持つ知識でそうフオローする。けどこの仮説もまた素人の推察でしかない。と、その時。

ヤズミ「ティガはありますよ！今出します」

そう言つて大型モニターに映つていた世界地図をズームインしていくと……。ズームされた場所が……。

アイナ「日本の」

シアン「東北!?」

僕たちの生まれ故郷、日本だつた。

その後、僕たちはガツツウイング1号、2号、そして試作機に分乗してダイブハンガーを発進。過去の言語を解析して得られた情報を元に僕たちは東北へと急いだ。

ホリイ「ホンマにこんな所にピラミッド在るんかあ？」

2号を操縦していたホリイ隊員の愚痴る声が通信機を通して僕の耳にも聞こえて来た。

アイナ「オオトリさんはどう思う？ピラミッドの話」

そんな時、前のシートに座っていたヤシロ隊員の声が聞こえて來た。

シアン「僕は正直、半信半疑です。ピラミッドなんて人工物、仮に木々や苔に覆われていたとしても誰かが気付きそうな物なのに」

アイナ「だよね〜」

と、二人で話していた時。

ムナカタ『上空からの搜索では埒が明かん。近くに降下できる

場所を見つけた。そこに降下し各自足でティガの
ピラミッドを探せ』

アイナ「了解」

その後、僕たちは3機を並んで降下、着陸させ、ムナカタ副長を2号に残して各々の足でティガのピラミッドを探し始めた。

僕はダイゴ隊員と一緒に歩いていた。

シアン「……ありませんね。ピラミッド」

ダイゴ「……」

僕の言葉に無言のまま歩き続けるダイゴ隊員とそれに続く僕。やがて小さな橋に差し掛かつた時だった。

「？」

不意にダイゴ隊員が足を止め周囲を見回し始めた。

僕はダイゴ隊員を追い越してからダイゴ隊員が足を止めているのに気づいて振り返った。

シアン「ダイゴ隊員? どうかしました?」

橋から森の方を見つめるダイゴ隊員を見て、僕は首を傾げながらもダイゴ隊員が向いている方に視線を合わせ、驚いた。

森の向こう、黄金の『何か』が薄つすらと見えていたから。その時。

アイナ「お〜い! 一人とも〜!」

丁度後ろから聞こえて来た声に僕は振り返った。

見ると、橋の下の川辺に他のみんな、ヤシロ隊員達4人が居た。
僕がみんなの方を向いていた、その時。

『ダツ！』

シアン「え？」

唐突にダイゴ隊員が脇目も降らずに走り出した。

レナ「ダイゴツ!!」

ホリイ「アカンツ！」

咄嗟に呼びかけるレナ隊員はホリイ隊員。僕も数コンマ躊躇つて
からもダイゴ隊員を追いかけた。

この時、僕たちはまだ、ゴルザとメルバがティガのピラミッドに接近
している事を、まだ知りもしなかつた。

ダイゴ隊員を追いかける僕たち。そこへムナカタ副長も到着し、
僕たちはこちらを無視しているかのようにピラミッドの中へと
入つて行つたダイゴ隊員に続くよう、恐る恐るピラミッドに近づいた。
ゆっくりとピラミッドに触れようとした僕の手は、空しく黄金の

ピラミッドをすり抜けた。

シアン「これ。……質量が無い。ホログラム、なの？」

アイナ「え？」

僕の疑問に、他の皆が驚く中、僕たちは慎重にピラミッドの壁を文字通り透過した。

そして、それらを、いや、『彼ら』を見つけた。

それは、光のピラミッドの中で起立する3体の巨神の石像だった。

シアン「これ、が。ティガの巨人」

アイナ「もしかして、この3体の石像が？」

驚きながらも、その巨人たちを見つめる僕たち。

しかし怪獣たちはノイズ部分を修復し巨人復活の方法を探り出すその時まで、待つてはくれなかつた。

通信によつてゴルザとメルバがこちらに接近していると言う事が伝えられた僕たちは、やむなく巨人を放置して撤退する事になつた。だが……。

ダイゴ「ああああああああつ!!」

不意に、叫んだかと思うとまたしてもダイゴ隊員が駆け出した。

シアン「ちよつ!? ダイゴ隊員!!」

さつきの事と言い今度は絶叫と言い。ダイゴ隊員ホントに

どうしたんだ?!

ダイゴ隊員の事が判らなくなりつつも、僕たちはそれぞれの機体に戻った。ダイゴ隊員が1号、ムナカタ副長以下4人が2号。僕とヤシロ隊員が試作機に戻った、その時。

レイコ『オオトリ隊員』

シアン「ツ。カシムラ博士?」

ダイブハンガーに居るカシムラ博士から通信が届いた。

レイコ『突然で悪いと思うけど、今そつちに向かつて3式機龍を

発進させたわ』

シアン「……ええつ!?

突然の事で、数秒間をあけてから驚く僕。

「ちよ、ちよつと待つてください! 3式機龍は災害救助用の

大型ロボットのはずじや!?

レイコ『そうよ。だから武装も無い。……けど、このままあの二匹を無視する事は出来ないと判断したT P C上層部の決定よ。目には目を。歯には歯を。でつかい化け物にはでつかいロボットを、つて事よ。

そして当然、それを操縦できるのは操作系統を搭載した試作機に乗っている、あなただけよ』
え？えええつ！？それってつまり……。

シアン「僕に、3式機龍を動かせ、と？それこそあり得ません！
僕は3式機龍の事を何も知らないんですよ！」

レイコ『悪いけど、これはもうすでに決定した事なのよ』
そ、そんな。僕に3式機龍を動かせと？そんな事、出来る訳。
と、僕が思っていた時。

???『大丈夫大丈夫！私が居るから！』

不意に、通信機からカシムラ博士とは別の声が聞こえて来た。
これは？通信に割り込まれてる？

『ねえねえお姉ちゃん！シートの上にレバーがあるでしょ？

それ引っ張つて見て！』

レバー？

シアン「これ？」

僕は天井部分にあつたレバーを見つけそれを引っ張った。するとモニターらしき物が現れた。

???『やつほ〜』

すると、そこに両肩を露出したカツトアウェイショルダーの黒い服を纏い、腰元まで届きそうな白髪ロングヘアの少女がそのモニターにいきなり現れた。

シアン「なつ!?き、君は誰？」

ユナ『私？私は『ユナ』だよ〜！よろしく〜！』

と、快活に挨拶されたけど僕が知りたいのはそこじゃなくて……。そんな風に思っていると。

レイコ『オオトリ隊員。その子、ユナは3式機龍に搭載されている支援用自立A Iよ』

通信機からまたカシムラ博士の声が聞こえ、説明してくれた。けど、A I、人工知能って、この子が？

改めて僕はモニターを見ると、画面の中の女の子、ユナちゃんが

ん?と首を横に傾げている。

まるで普通の女の子みたいだ。

その時。

『GAAAAAN!!』

陸路で接近していたゴルザがティガのピラミッドの真ん前まで接近。僕たちが見守る事しかできないまま、ゴルザは額からエネルギーのような物を照射しピラミッドを破壊してしまった。

アイナ 「ピラミッドが!」

シアン 「ツ!カシムラ博士!機龍は今どこですか!?」

カシムラ 『現在VTOOL機4機により岩手県内を飛行中。

後数分でそちらに到着するわ』

シアン 「急いでください!このままじゃ巨人の石像が!」

アイナ 「あつ!メルバを確認!」

え!?

通信に集中していた僕が視線を戻すと、太平洋方面から飛來したメルバが巨人たちの近くに着陸した。来た。来てしまった。

そして、石像を破壊し始めるゴルザとメルバ。その時。

ダイゴ「止めろおおおおおっ！」

ガツツウイング1号、ダイゴ隊員が二体に向かつて行つた。

シアン「ッ!?無茶です！引き返して！」

咄嗟に警告する僕やムナカタ副長たちの声を無視して、ダイゴ隊員は果敢に二匹に向かつて行つた。でも、メルバの放つた光弾が1号のエンジンに被弾。みんなが脱出を促すが、故障らしく脱出できないつて。

そんな、まさか……。

そして、僕たちの予想が現実となつた。

『ドオオオオオンッ！』

1号が山間部に墜落してしまつた。激しい爆音を爆炎が上がる。

嘘、そんな、まさか。……ダイゴ隊員が？

僕が自分の目を疑つていた時。レーダーが反応した。見ると、山を越えて4機の垂直離着陸機にワイヤーで吊るされた銀一色の3式機龍が現れ、僕たちの近くに着陸した。

ワイヤーが離され、機龍が地面に起立している。まるで、あの

巨神たちのように。

レイコ『オオトリ隊員。良い？今あなたのPDIに機龍起動用の電子キーをインストールしたわ。それを操縦席の右側にあるスロットに装填して。……できるわね？』

そう言われた僕は、震える手で右腰のPDIを抜き取り、点滅しているスロットにそれを差し込んだ。

《起動キー、装填確認》

すると、唐突にユナちゃんが喋りだした。かと思うと、突如シートの左右の床下から操縦桿らしき物が二つ、せりあがってきた。

《遠隔操縦システム、アクトイベート。}

《操縦桿を握つてください》

その言葉に、僕は震えながら操縦桿に手を伸ばした。震える理由は、緊張と怒り。

そして、僕の手が操縦桿をギュッと握った次の瞬間。

《3式機龍、アクトイベート》

『KYUAAAAN!!』

そして、3式機龍の甲高い金属の咆哮が周囲に響いた。

一瞬、こちらを向くメルバとゴルザ。

しかしゴルザは視線を戻すと自分の前に倒した最後の一体の石像の胸を踏みつぶそうとしていた。

そんな事、させるか！ダイゴ隊員の仇！

そう思い僕が操縦桿を動かそうとした、その時。

僕の場所では見えなかつたが、石像の腕が動き、ゴルザの脚を受け止めた、そして……。

『タアツ！』

何かの掛け声とともに、瞬く間に色づいた巨人がゴルザの足を押し戻し転倒させた。

すぐさま起き上がる巨人。

赤、青紫、銀の3色で色付けされたトリコロールの巨人が突如として復活した。

僕以外のみんなが、その事に驚いている中で僕は3式機龍を動かしていた。

狙うは、あの巨人と向かい合っているゴルザ。

僕は機龍の両腿のスラスターを展開させ、機龍をゴルザ目掛けて突進

させた。

ゴルザがスラスターの音に気付いて機龍の方を向いた。
でも遅い！

シアン「喰らえっ！！」

次の瞬間、スラスターで加速した機龍の右腕のラリアットが
ゴルザの胸に命中し盛大に火花を散らした。

『G A A A A N !』

一撃に悲鳴のような声を上げながら後退るゴルザ。

しかしどうやら大したダメージになつていなかの、奴は
すぐさま機龍の方に向かつて來た。

不味いっ！

遠隔操作の機龍と生物の奴じや格闘戦で組疲れたらこちらが
不利になる！

だが、僕がそう思つた瞬間。

『タアツ！』

巨人がゴルザを側面から攻撃し、その頭部にチョップを叩き込んだ。
そのまま連続で攻撃をし、そのままゴルザを抑え込む巨人。

しかしそこにメルバが向かつて來た。

けど！

シアン「ダイゴ隊員の！」

僕は目一杯操縦桿を操作し、そして……。

「仇いいいいいいツ！」

ユナ『スラスター、全快イイイイツ！』

スラスターを全力噴射して機龍をメルバの横から突進させた。

『AAAAN!!』

どうやらゴルザより軽いのか、メルバは機龍の体当たりで盛大に吹つ飛んだ。

その間に、巨人は再び光線を放とうとしていたゴルザを抑え込んだが、押され気味だ。

ここは！

『KYUAAAANN!』

僕は3式機龍を走らせ、ゴルザの右腕に掴みかかり、両手でその右腕を抑え込んだ。

シアン「機龍のパワーがお前より低いとしても！」

ユナ『2対1なら負けないよ!』

機龍と巨人でゴルザを抑え込むが……。

『AAAAA!!』

そこに翼を開いたメルバが突進してきて巨人と機龍を弾き飛ばした。

『ダアツ!?』

ユナ『イツタ～～イ!』

倒れた巨人と機龍。

巨人は素早く起き上がるが、僕の操作する3式機龍は機械操作のためかやつぱり他の3体より動きが鈍い。

そして、起き上がった巨人に攻撃が集中した。

ゴルザの光弾を側転で避ける巨人。しかし直後メルバに組みつかれ、無防備な背中をゴルザが攻撃する。そのままメルバの腕に弾き飛ばされ倒れる巨人。

だけど!

シアン『僕たちを!』

ユナ『忘れるな～～!』

もう一度、僕はスラスターを吹かしてゴルザの背後から体当たりをした。

突然の背後からの奇襲で驚きでバランスを崩して前に倒れるゴルザ。

そしてさらにスラスターで巨人に集中していたメルバ目掛けて突進。

対応が遅れたメルバが胸にショルダータックルを喰らつて倒れた。

その隙に、僕は機龍を巨人の近くに着陸させた。立ち上がった巨人が機龍の隣に並ぶ。起き上がったゴルザとメルバも並んでこちらを

威嚇するように咆哮している。

そんな時、ガツツウイング2号から見ていたホリイ隊員が一言呟いた。

ホリイ「なんちゅうタッグマッチや」

と、僕たちには聞こえなかつたが、そうホリイ隊員が呟いたすぐあと、巨人の額のクリスタルらしき物が光つたかと思うと、巨人が眼前で手首をクロスさせ、振り下ろした。

すると、青紫色の部分が赤く変色。これで赤と銀のツートンカラーになつてしまつた。

アイナ「色が変わった!?」

驚くヤシロ隊員。

一方ゴルザとメルバはそれに危機感を覚えたのか、それぞれが光線を

放つ。けどそれは右手をかざした巨人が生み出したシールドによつて防がれた。

そして巨人は振り返つて機龍に向かつて頷いた。

モニター越しにそれを見た僕は、すぐに機龍を操作し、巨人を『飛び越えた』。

そして……。

シアン「このおおおおおつ！」

機龍のスラスターを生かした大ジャンプでメルバに向かつて跳躍。フライングボディプレスを繰り出しメルバを押し倒した。

その隙に、巨人は先ほどパワーで負けていたはずのゴルザを相手にそのパワーで圧倒していた。

アイナ「あの巨人、さつきよりパワーが増してゐるの？」

上空を旋回しながらのヤシロ隊員の言葉に、一瞬僕の注意がそちらに向いた。

その隙に、メルバは機龍を弾き飛ばして上空へと飛んで行つた。

シアン「ツ！ しまつた！」

ユナ『あ～！ 逃げられた～！』

メルバはそのまま空中から攻撃を始めた。巨人は何とか反撃しようとしているが、空を飛ぶメルバ相手に攻撃を当てられずに苦戦した。しかもその隙に地中に逃走しようとしているゴルザ。

『もう一匹が逃げるよ！』

シアン「このつ！」

咄嗟に尻尾を掴んで引き抜こうとしたけど、背中にメルバの突進を受けて前のめりに倒れる機龍。

巨人の方もメルバの攻撃を受けて動けず、結局ゴルザを逃してしまった。

くっ!? そもそも3式機龍は非武装の設計だから飛び道具なんてない！かといってスラスターで突進しても、機龍にはそこまでの旋回性能なんて無い。簡単に背後を取られて落とされる。

どうすれば……。

と、その時。突然巨人の胸に合った青く輝くクリスタルが赤く点滅を始めた。そして、巨人は再び頭上で手を交差させ振り下ろした。すると今度は青紫と銀の二色に変化。すぐさま飛び上がつてメルバの頭部にキックを打ち込み撃墜させた。

そして巨人は、のろのろと起き上がりつたメルバに対し、エネルギーを集めるような動作で作り出したエネルギー弾を手裏剣のように投げつけた。

それを躊躇が出来ずに、胸に受けたメルバは一拍置いてバラバラに碎け散つた。

それを、モニター越しやその目で見ていた僕たち。

アイナ「倒した、の？」

ユナ『っぽいね』

驚くヤシロ隊員とユナちゃん。

やがて巨人はメルバを倒すと、どこかへと飛び去つて行つた。

何はどうあれ、僕たちはメルバを倒しゴルザを撃退した。

巨人も一人だけだが復活した。

……しかしダイゴ隊員は。

僕がそう思い、唇を噛みしめたその時。

ユナ『あっ！ ねえねえあそこ！ 誰かいる！』

シアン「え？」

ユナちゃんの声に落としていた視線をモニターに移すと、そこには

川辺を走るダイゴ隊員の姿があつた。

「ダイゴ隊員！・生きてたんだ！」

元気に走りこちらに手を振るダイゴ隊員。

その後、僕たちはダイゴ隊員を回収して一路ダイブハンガーへと戻つた。

しかし、この時の僕たちにはまだ、知る由も無かつた。

ゴルザとメルバとの戦いが、これから地球に襲い掛かる

幾星霜の戦いの中の、たつた一粒の、初戦でしかない事を。

果たして、これから彼らに襲い掛かる物とは一体？

その答えを知る者は、まだ誰もない。

第1話 END

エピソード2 『その巨人の名は——』

「前回までのあらすじ」

世界各地の超常現象を調査するチーム、GUTSに所属するシアンや彼の仲間たち。ある日彼らは正体不明の怪獣と遭遇する。そして直後、過去に存在した古代文明のタイムカプセルからの情報を得た彼らは、怪獣と戦うためにティガの巨人を探し見つけ出した。しかし巨人の復活方法が分からぬまま現れた怪獣ゴルザとメルバが2体の巨人の石像を破壊。あわや最後の石像も破壊されかけるが、シアンたちの知らぬうちに彼の仲間であるダイゴ隊員が光となつて巨人、ウルトラマンティガと融合し復活。更に巨大ロボット3式機龍も駆けつけ、ティガとシアンが操る機龍はゴルザを退けメルバを粉碎するのだつた。

ゴルザとメルバとの戦いから数日が経つたある日。GUTS司令室では一つの報告が行われていた。

アイナ「3式機龍を!?」

シアン「GUTSの所属とする!?」

それは、対ゴルザ・メルバ戦での活躍を評価して3式機龍をGUTS所属の対怪獣兵器とすると言う旨を伝える物だつた。レイコ「知つての通り、機龍はあるの戦いで怪獣と互角に戦つたわ。

そのため、急ではあるけどTCP上層部は機龍を

あくまでも対怪獣用と限定しての武装化を決定したわ。

加えて、試作機に関しても急きよGUTSへの正式

配備が決定。以降は『ガッツウイングSS』となるからよろしく。パイロットは引き続き、操縦士をヤシロ隊員。機龍の操作及び索敵をオオトリ隊員が担当して頂戴

シア・アイ「は、はい」

カシムラ博士の言葉に、僕とヤシロ隊員は驚きつつ頷く事しか出来なかつた。その時。

ユナ『ね～ね～！次は私に自己紹介させてよ～！』

ムナカタ「な、何だつ!?」

突如として司令室にユナちゃんの声が響き、驚くムナカタ副長や

ダイゴ隊員達。

その時、司令室の大型モニターにあの時の姿のユナちゃんが映し出されみんながそつちを向いた。

ホリイ「子供?」

ユナ『はじめまして! ユナだよー! これからよろしくね!』

と、元気良く挨拶をするユナちゃんだけど僕とカシムラ博士以外のみんながポカンとしている。

レイコ「オオトリ隊員は知っているでしようけど、改めて紹介するわね。彼女の名前はユナ。3式機龍内部のコンピューターに存在するパイロット支援用AIよ。名前は、

『汎用次世代型人工知能』の試作機、『Utility·Next-generation Artificial Intelligence』に試作機の意味を持つY
a
t
i
f
i
c
i
a
l
—
i
n

を

頭文字にして、Y、U、N、A。だからユナよ』

ユナ『これからよろしくね、ヤシロお姉ちゃん、オオトリお姉ちゃん』

そう言つてはにかんだ笑みと共に挨拶をするユナちゃん。

……つてちょっと待つて。お姉ちゃん？

シアン「あのね、ユナちゃん。僕男だから、男だからね？」

ユナ『え？ そうなの？ だつてお姉ちゃん、『女人みたい』だよ？』
『女人みたい』。

そんな思い言葉が僕の背中にのしかかる。い、いや、分かつていた。
分かつていた事だけど、やつぱり面と向かつて言われると辛い。

僕がそう思いながら項垂れでいると、苦笑していたカシムラ博士が
説明を再開した。

レイコ「ユナの大本は3式機龍のC.P.だけど、それはT.P.C.のメイン
サーバーと當時オンラインで繋がってるから、ユナも

ちよくちよくここに顔を出すでしょうからよろしくね」

アイナ「はいっ！」

シアン「りよ、了解しました」

と、僕とヤシロ隊員は返事をした。

その翌日。何と西南諸島に怪獣が出現したという報告が現地を
訪問中のT.P.C.総監、『サワイ・ソウイチロウ』総監から送られ、
機龍の武装化を追う形で急きょG.U.T.S.のライドメカを戦闘用に

改造する事になつた。

その一方で、僕は……。

シアン「うくくん」

ユナ『シアン。何してるので？』

僕が司令室で書庫から漁つてきた古い書物と睨めっこしていると近くに開いたまま置いていたP D Iにユナちゃんが現れて首を傾げて來た。

シアン「うん、ちょっと過去の文献を見直してたんだ」

ユナ『過去の文献？それって、古い本の事だよね？』

シアン「そ。それこそ紀元前の頃のとかにあつた物の写本の翻訳版を見返しているの」

ユナ『どうして？』

シアン「もしかしたら過去の伝承の中に怪獣の居場所を記した物が無いかと思つてさ」

なんて言つていると僕の横にお茶が置かれた。それに気づいて視線を移すとヤシロ隊員が居た。

シアン「ヤシロ隊員。ありがとうございます」

アイナ 「どう？ 何か分かつた？」

シアン 「駄目です。過去の文献に何か巨大生物の伝承とか無いかと思つたんですが、ゴルザに匹敵する程の大きさの物は殆ど。精々、ダイオウイカが元のクラーケンの話程度でした。仮に怪獣の大きさをゴルザやメルバ、あの巨人と同等だとして、最低でも身長は50メートル。そんな大きな生物を見たとなれば如何に昔とはいえ本か何かにデータとして残つてるかと思つたのですが……」

僕が目頭を押さえながら体を伸ばしていると、ヤシロ隊員が本の一つを持つてペラペラとめぐり始めた。

アイナ 「これって、日本の？」

シアン 「はい。怪獣の事もそうですが、巨人の事も調べてみようと思つて。巨人が3体だけ、という証拠もありませんから。日本にあのピラミッドがあつたならもつと他に何か情報が無いかと思いまして」

アイナ 「そうね。……ん？」

本をめぐりながら相槌を打つていたヤシロ隊員が疑問符と共に

手を止めた。

シアン「どうかしました?」

aina「ああ、うん。これ、どう思う?」

そう言いつつ僕の前に本のページを置くヤシロ隊員。そこには……。

「沖縄の方にある西南諸島の久良々島つて所の伝承

何だけど……」

シアン「えっと。彼の島には石を喰らう大蛇の姿有り。大蛇は怪しき光にて万物を石に変えそれを喰らう」と、僕は文章の一部を読み上げていたのだけど……。

「島の民はその大蛇を、えっと……。これ、何て読むんでしようか?この漢字の部分」

その大蛇を指す単語の部分、『牙琥魔』と言う場所だけは読めなくてヤシロ隊員の方に見せたんだけど……。

aina「こつちは牙、だから『きば』とか『が』って読むのかな?最後のは悪魔の魔だから『ま』、かな?でもこの真ん中の字つて何だつけ?」

とヤシロ隊員も首を傾げてしまつた。

ユナ『どれどれ？ ユナに見せて』

そう言われた僕は本をP D Iの方に向けて来た。

『ああこの部分ね。ちょっと待つて』

と言うとユナちゃんはいきなり眼前に本の様な物を出現させるとそれをパラパラめくつた。

後から聞いた話だと、これはネット検索の行動を絵として表現していたらしい。

で、結果はと言うと……。

ユナ『あつた。それっぽい噂あつたよ』

と言うと、司令室に大画面にその情報が映し出された。

『その漢字はそれで『ガクマ』って読むみたい。大昔から沖縄とかで言い伝えられてる土地神つて奴の話が

ネットに載つてたよ。……まあU M Aとかを探す人がやつてるサイトだから信ぴよう性は無いかもね』

と言うと、ユナちゃんは本をほっぽりだすとどこかへと行つてしまつた。
それを見つづ、僕はP D Iを閉じて、本に映つていた大蛇らしき物の絵に視線を移した。

シアン「ガクマ、か」

それだけ言うと、僕は粗方読み終えた本を書庫に戻すために司令室を後にした。

（）

その後、ダイゴがヤズミと巨人、ティガの観察をしたり
ユザレと一人で会話していた中。シアンは書庫に本を
返し司令室に戻ろうとしていた時だった。

（）

結局、古い本を漁つても怪獣らしき物の話は無かつたな。。
……でも、歐州なんかには古い龍の目撃情報なんかもあるし、
やつぱり神話なんかの怪物の元つて、怪獣なんじや……。
と、僕がそんな風に考えながら書庫室を出て歩いていた時だった。

イルマ「オオトリ隊員」

シアン「あ、イルマ隊長」

イルマ「書庫室に何か用でもあつたの？」

シアン「はい。古い書物に何か怪獣の手がかりになる物は無いかと

思つて漁つていたんですけど……』

イルマ「で、成果は?」

シアン「期待できる程の物は何も。気になる記述はいくつかあつたんですが、それも怪獣かどうかは判別できない物でした」
そう言つてイルマ隊長と並んで歩いていた時だつた。

『PLL! PLL!』

不意に僕と隊長のPDIが同時に振動しながら着信音を鳴らした。何だろうと思いつつ僕と隊長がPDIを開くと、そこにはGUTS、延いてはTPCのトップに立つサワイ総監が映つていた。

サワイ『GUTSに告ぐ。直ちに出動せよ』

それは、僕達に対する出動の命令だつた。

シアン「隊長!」

僕が咄嗟にイルマ隊長の方を向くと、隊長は無言で頷いた。

イルマ「司令室に。急ぐわよ」

シアン「はい!」

その後、僕達は司令室へと急ぎすぐさまカシムラ博士の元に通信を入れた。

今、ガツツウイング全機が博士の元で強化改修を受けていたのだけど……。

レイコ「そんな無茶な！」

出撃したいと言う隊長の発言にそう言われてしまつた。

「出動するって言つても、2号は改造の真っ最中でバラツバラなの！」

S Sは何とか機首のランチャーをバルカン砲に換装したけど、

けどそれだけよ!? 戦力としてまともとは言えないわ！」

3式機龍だつて今はオーバーホール中で動かせないし！」

と、出撃に反対する博士だつたけど、同じ部屋に居たレナ隊員や
ホリイ隊員の説得によつて、何とかレーザー砲を搭載した

ガツツウイング1号とガツツウイングS Sが出動する事になつた。
すぐさま、僕とヤシロ隊員。レナ隊員達が1号とS Sに分乗して
ダイブハンガーから発進。南西諸島を目指した。

（）

一方、基地では残つていたイルマがサワイの元に通信を入れていた。

イルマ「現在、ガツツウイング1号とガツツウイングS Sがそちらに

向かつて発進しました」

サワイ『わかつた。……イルマ隊長、実は君に伝えておくことがある』

イルマ「なんでしょう？」

サワイ『数日前、我々TPC本部がGUTSの武装化を決定したが、その際に1名ほど人員を追加する事になった。本来なら今日そちらに合流する予定だつたのだが、先ほどこちらから連絡を入れ、GUTSに追加する予定の改良型ガツツウイング1号と共に南西諸島に向かつてもらつた』

イルマ「新たな隊員ですか？それで、その隊員とは一体？」

サワイ『うむ。彼女の名は――』

その時、サワイの口から聞こえた名を聞き、その場にいたイルマだけが驚くのだつた。

現場へと急行する1号と僕を乗せたSS。そして、僕達が到着した時には4足歩行で頭部に結晶のような角を持つ怪獣、『ガクマ』が暴れていた。

採石場の大型ダンプや機材を、その口から吐く青い光で石に変えて行くガクマ。

あれじやまるでギリシャ神話のゴーゴンじやないか！

シアン「ヤシロ隊員！あの光線だけは何があつても回避して下さい！当たつた瞬間に終わりです！」

アイナ「了解っ！！」

シアン「レナ隊員！数です！2機で数の有利を生かして奴の的を絞らせないでください！石化光線を撃てるといつても口からだけです！」

レナ『了解！』

短く提案を伝えると、1号とSSが左右に、Y字を描くように散開した。案の定、ガクマは左右どちらを狙うかを悩んだ末、ガクマ側から見て左に回り込んだ1号に的を絞つた。

シアン「ガクマ、1号を狙ってます！」

機体の下部にあるガンカメラからの情報を見て、状況を逐次パイロットであるヤシロ隊員に伝える。

アイナ「了解っ！だつたら！」

次の瞬間、ヤシロ隊員の操縦で機体下部にある姿勢制御バーニアを利用した急激な旋回を行い、ガクマのがら空きの背中を射線に捉えた。

ぐうつ！すつごいGだ！

そんな中、僕は体に掛かるG、重力に呻き声を上げてしまった。

「そこつ！」

そんな中でも呻き声一つ出さずにヤシロ隊員が操縦桿のトリガーを引いた。

『バババババババツ！』

機首に内蔵されたバルカン砲が火を噴き、ガクマの背中に命中。いくつもの火花を散らした。しかし、それだけで倒れる程

ガクマは軟ではなかつた。

僕としては、それで終わつて欲しかつたと思つていたのだけど……。

『QUUUUUUN!!』

するとガクマから、金切り声のような悲鳴とも怒りの咆哮とも取れる声が聞こえて来て、こちらに体を向けて來た。

不味いっ！

シアン「攻撃が来ます！ブレイク！ブレイク！」

僕の声に従い、操縦桿を倒して機体を捻らせたヤシロ隊員。

そしてSSの僅かに離れた地点を青白い光線が通過していく。

その隙に、今度はガクマの背中に接近した1号がビーム砲をその背中に叩き込んだ。

しかし……。

ムナカタ「クソツ！ダメだ！こつちの攻撃も殆ど効果が無い
ように見えるぞ！」

レナ「だからって、諦める訳には！」

そう言いつつ、レナ隊員が操る1号が攻撃を仕掛けた。しかし……。

『ぐわっ！』

なんと、ガクマがその巨体で立ち上がった！

シアン「なつ!?」

僕がその様子を見ている中、ガクマに接近していた1号は回避が間に合わず、その背のトゲトゲの装甲に激突。

幸いと言うべきか、1号は砂利の上に胴体着陸した。

「ムナカタ副長！レナさん！大丈夫ですか？！」

返事をしてください！」

咄嗟に呼びかける僕。

レナ「う、うう。な、何とか」

ムナカタ「オ、オオトリ隊員か。こつちは何とか無事だ」
通信機越しに、二人の声が聞こえて來た。

しかし、撃墜した1号に向かつてガクマが歩みを進めていた。
シアン「ガクマがそつちに向かっています！早く脱出を！」

ヤシロ隊員！』

アイナ「うん！わかってる！二人の所へは、行かせないつ！」
その言葉通り、ヤシロ隊員の操るSSが急反転。ガクマの背中に
機関砲弾を叩き込んだ。

『QUUUUUUN!!!』

咆哮を上げ、注意をこちらに向けるガクマ。

シアン「食いついた！二人は今の内に退避してください！」

ムナカタ「すまないっ！」

1号から脱出したムナカタ副長がレナ隊員に肩を貸しながら離れていく。

ガクマがその二人に気付いた様子はなく、奴は相変わらず僕達の
SSに狙いを定めていた。
しかし、SS一機になつてしまつた以上ガクマの攻撃がこちらに
集中してしまつた。

『ギュウウウウンッ！』

シアン「うううううううつ!!」

背面のスラスターも使つて、地面スレスレに飛んで攻撃を回避するヤシロ隊員の腕前に正直驚いてるけど、完全に避けの一辺倒でまともに攻撃に移れなかつた。

「また来ます！」

アイナ「くうううつ!!」

ひらりと、横へのロール運動で回避するアイナ隊員。

「あの怪獣が弱つてる様子はない!?せめて光線を吐けなくなる前兆とか!」

シアン「ダメです！全然疲れている様子がありません！」

奴は何度も石化光線を吐き続けているけど、疲れている気配はない。

アイナ「このままじゃ、光線に当たらなくとも燃料が切れちゃうよ！」
ヤシロ隊員の言う事も最もだつた。

S Sは通常のエンジン以外にも機体下部のスラスターを使つて高機動戦闘が出来るけど、その分燃費は1号より悪い。

このままだと完全にじり貧だ！

せめて、あの巨人か3式機龍があれば……。

そう思つて僕が苦虫を噛み潰したような表情をしていた時。

『ピピピッ！』

シアン「ツ。レーダーに感あり。何かが光速でこちらに接近しています。2号機、じやない。……12時方向、正面より接近。まもなく視認可能距離に接近。

交差します」

僕が報告を続ける中、僕達の目の前にそれが近づいて来て、瞬く間にSSの隣を通り過ぎて行つた。
そして、僕達が見たのは……。

「紫色の、ガツツウイング1号？」

咄嗟に、見えた物を声に出して呟く僕。見えたのは、正しくガツツウイング1号のフォルムをしていた飛行機だつた。
けど僕達の1号とはカラーリングが違い、機体全体が紫で塗装されていた。

と、その時。

???『こちらガツツウイニング1号MkII。こちらを援護します』

不意に、僕とヤシロ隊員の通信機に通信が入った。
シアン「こちらガツツウイニングSS了解」

咄嗟に返答する僕だったけど、今の声からして、女人の人？
声からして多分そうかな？と思いつつ、ガンカメラを動かし
あの人1号機MkIIを追つた。

MkIIは既に武装が施されているらしく、機首からビームを発射。
ガクマの顔に命中し、ガクマは苦悶の悲鳴を漏らした。

攻撃された事で怒ったのか、ガクマは標的を僕達からMkIIに
変更し、攻撃を開始した。

けどMkIIはヒラリヒラリと攻撃を回避しては、山を盾にしたり
山肌や地面レスレに飛行したりしてガクマの死角に回り込み、
何度もビームを叩き込んだ。

アイナ「すごい腕前。あのガツツウイニングに乗ってる人は一体」
MkIIの戦いぶりに、それを遠巻きに見ていた僕達は驚嘆した。
と、その時……。

『ビシュツ！ドオオオオンツ！』

『Q U U U U U N !!』

何処からともなく放たれた、1号のビームの比じやない太さのビームによる攻撃がガクマの背中に命中し、ガクマが絶叫のような悲鳴を上げた。

僕がガンカメラを動かすと、そこに居たのは……。

シアン「ガツツウイング2号！」

アイナ「改修作業、終わつたんですね！」

船体を左右に開き、でつかいビーム砲の砲口らしき物を覗かせるガツツウイング2号だつた。

ホリイ『待らせたなあみんな！さあダイゴ！

トドメのデキサスビームをお見舞いやあ！』

ダイゴ『了解っ！』

通信機越しに、2号に搭乗しているホリイ隊員とダイゴ隊員の声が聞こえてくる。

『デキサスビーム、発射！』

次の瞬間、その声と共に発射された黄緑色の極太のビームが

僅かに立ち上がったガクマの腹部に直撃。

盛大な煙と火花を上げながら倒れこんだガクマは、そのまま爆散した。

シア・アイ 「やつたあああああっ!!」

そして、それを見た僕とヤシロ隊員はSSのコクピットの中で喜びのあまり叫んでしまうのだった。

その後、SS、2号、1号MkIIを適当な空き地に着陸させサワイ監督の元に集まる僕達7人と、例のMkIIの女性パイロットさんというのが……。

サワイ「折角なので紹介しておこう。本日付けてGUTS10人目のメンバーとなる予定だった、『コウブイン・ユウヒ』隊員だ」
ユウヒ「コウブイン・ユウヒです。初めて」

そう言つて挨拶をするユウヒ隊員の髪の色は、どことなくMkIIの紫にも似て、立ち姿や顔立ちなんかを見ていると、正に

『凛々しい』って言葉が似合いそうな人だった。

でも、ユウヒ隊員は何か長方形のでつかいケースを片手に下げていた。

何だろうと僕が思つてゐる中、サワイ総監が話を始めたので、
僕もそちらに耳を傾けた。

サワイ「元々は対怪獣部隊として変更が決まつた際に、あの
武装を施した1号、MkIIを受領次第合流する予定

だつたんだが、運悪く今日あの怪獣が出現してしまつた
為、急きよこちらに向かつてもらつたと言うわけだ」

シアン「そだつたんですか。ありがとうございます。助かりました」
ユウヒ「いえ。未来の戦友を助けただけです。お礼を言われるような
事は何も。……しかし」

と、最初は笑みを浮かべていたユウヒ隊員だつたけど、すぐに
表情を引き締めた。

「これまで何千年もの間姿を現さなかつた怪獣が、ゴルザと
メルバ出現後。これほど短時間で3体目が現れるなんて」

ムナカタ「これがもし、世界規模での怪獣出現の、前兆なのだとしたら。

世界は大変な事になりますね」

サワイ「うん。本部に戻つたら早速、TPC全支部の改革に着手
しようと思う」

シンジヨウ「それまで、しばらくはこのGUTSにお任せください」
ホリイ「いやしかしあスキッとしたでえ。また怪獣にお目に掛かりたい
くらいやあ」

いやいやいや。

シアン「僕は嫌ですよ、怪獣なんて。僕達石にされる所だつた
んですから！」

なんて冗談めいた事を言つていたその時。

『グララツ！』

唐突に地面が揺れ始めた。

な、何だ？ 地震？

と、僕達がそう思つていた次の瞬間。

『ドオオオオオンツ！』

ガッツウイング2号、1号MKII、SSが着陸していた

すぐそばの地面の下から、『もう一体のガクマ』が出現した。

アイナ「なっ!? もう一体のガクマ!？」

シアン「ホリイ隊員が変な事言つから！」

ホリイ「それ今言つ!？」

と、若干悲鳴じみたコントをしながら、僕達は駆け出した。

近くの岩陰に、僕とヤシロ隊員、ユウヒ隊員の3人が逃げ込んだ
そしてガクマがTPCのテントを踏みつぶそうとしたその時。

『ピカツー』

何かが光つたかと思うと、突如としてあの光の巨人が現れた。

アイナ「光の巨人!?」

シャン「来てくれたんだ！」

ユウヒ「あれが、噂の」

驚く僕達を後目に、2体目のガクマと戦い始める巨人。

巨人は突進してきたガクマの顎を掴んで受け止めると、ガクマ
を上に持ち上げ、がら空きの腹部にキックを入れて吹き飛ばし、
起き上がったガクマの背中に馬乗りになりながら何度も

チヨップを叩き込んだ。

しかし、2体目のガクマは背中から赤い雷撃の様な物を放ち、
背中の巨人を弾き飛ばした。

更にガクマは石化光線を吐きかけるが、巨人はそれを華麗に回避して
ガクマに掴みかかつた。

そのまま肉弾戦を続ける巨人とガクマだが、ガクマは頭部の角からの雷撃、伸長した爪と、前を向いた角の突進攻撃の前に、次第に巨人は押されていった。

そして、更に投げ飛ばされ立ち上がった直後の巨人の足に石化光線が命中。一瞬で石になる事は無かつたけど、あれじや巨人は動けない！不味い、このままじゃ！

と思つていた時。

ユウヒ「お二人とも、どちらか射撃に関する経験はありますか？」

そう言いつつ、ユウヒさんはさつき持つていたケースを開いた。

中に入っていたのは、大きな銃、俗に言うアンチマテリアルライフル、対物銃のような形をした物だつた。

(※ イメージは『バレットM82』)

シアン「これって」

ユウヒ「対怪獣用のために、元防衛軍の技術者が設計した

大型ライフルです。特殊な徹甲弾を使用するもので

試作品です。どちらか使える方は？」

アイナ「わ、私は、長距離射撃はあまり……」

そう言うヤシロ隊員。それにさつきまでヤシロ隊員はSSを操縦して集中力を失っているかも知れない。だつたら……。

シアン「僕にやらせてください。実物の使用経験はありませんが、長距離射撃なら経験があります」

ユウヒ「わかりました。弾はこの弾倉1つ分、5発だけです。

お願いします」

そう言われた僕は手早く対物ライフルを受け取り、マガジンをセット。銃弾を薬室に送り込み、バイポッドを展開してガクマを狙つた。

そうこうしている内に、石化は巨人の胸元まで達していた。ガクマも巨人目掛けて突進しようとしている。

させない！

僕は備え付けのスコープを覗き込み、ガクマの『目』を狙つた。いかに皮膚は強靭とはいえ、眼球なら！

すう、はあ、すう、はあ……。

息を吐き出しながら、指と目に集中する。

狙うのは目。奴の移動のテンポと、風を考えて。
狙う。当てる。当てる。絶対に当てる。

そして……。

ここだ！

『ドオオオンッ！』

ここだと思った僕は、ためらわずに引き金を引いた。
盛大なマズルフラッシュと共に巨大な銃弾が放たれ、
ガクマへと向かつて行つた。
そして……。

『ズシャアアアツ！』

『Q U U U U U N ! ? ! ? !』

僕の放つた銃弾は見事にガクマの左目に命中した。

シアン「やつた！！」

その痛みで地面を転げまわるガクマ。
と、その時。

『ンンンンツ！ハツ！』

巨人があの時と同じようにタイプを変化させ、更にその衝撃で石化した部分を弾き飛ばした。

そして、痛みで転げ回っているガクマの顎を持ち上げ、腹部にパンチを叩き込む巨人。

しかしガクマもやられっぱなしではなく、起き上がつて飛びかかってきた巨人を背中からの赤い雷撃で迎撃した。しかし巨人はそれすらもはじき返し、飛び上がってチョップでガクマの2本角をへし折った。

そのまま弱ったガクマを持ち上げ、投げ飛ばす巨人。

そして巨人の放つた赤い光流を受けたガクマは、最後はその体を石のように変化させると、バラバラに碎け散つて消滅した。それを見届けた巨人は、僕の方を向くとサムズアップをした。どうやら、僕の援護に気付いていたらしい。

僕も同じようにサムズアップを返すと、巨人はどこかへと飛び去つて行つた。

その後、ダイブハンガーに戻つた僕達は改めてユウヒ隊員の

自己紹介をしつつ、今後に向けて話をしていた。
その時、ダイゴ隊員が言つた事というのが……。

ダイゴ「あの、ウルトラマンティガ、なんてどうですか?」

そう言つて、巨人の名前を決める事になり、ダイゴ隊員の案が採用された。

こうして、僕達はある巨人を、『ウルトラマンティガ』と呼ぶようになつたのだった。

第2話 END

エピソード3 『魔人襲来』

～前回までのあらすじ～

GUTSに配備される事になつた3式機龍。

そんな中でシアンは怪獣に関する記述を探すために過去の書物を調べたり、ダイゴ達は光の巨人についての説明を進めたりしていた。

そんな中、西南諸島に怪獣『ガクマ』が出現。

武装を施したガッツウイング1号、SSで立ち向かい奮戦するシアンたち。あわや2体目のガクマに敗れそうになるながらも、巨人によつて守られたシアンたち。

新たな仲間、ユウヒを迎えてダイゴの提案によつて光の巨人は『ウルトラマンティガ』と名付けられたのだった。

ガクマ出現から数日後。

僕はヤシロ隊員と一緒に支給された新装備の銃、GUTSハイパー

の射撃練習をしていた。

何回か射撃を行うけど……。

命中率じやヤシロ隊員には敵わない。

シアン「ヤシロ隊員、凄いですね」

目を保護するゴーグルと耳を保護するヘッドフォンを外し隣に居るヤシロ隊員に話しかける僕。

アイナ「え？ そうかな？ けど、私だって狙撃に関しては

オオトリさんには勝てないし」

そう言つて笑みを浮かべながら謙遜するヤシロ隊員。

一方そう言われた僕は、近くのガンケースに立てかけられたあの対物銃に目を向けた。

僕がこれまで握った経験があるのは長距離射撃用のビームライフル。短距離射撃用の拳銃の類はあんまり経験が無かつた。そのため、GUTSハイパーのような射撃ならシンジヨウ隊員やヤシロ隊員に及ばない。でも逆に長距離狙撃ならまだ自信がある。

……今にして思えば、僕が他の皆より少しばかり

得意な事つて、それくらいしか無い。
と、僕がそんな事を思つていた時。

『シユツ』

訓練場の扉が開いて、ユウヒ隊員が現れた。

ちなみに、コウブインだと堅苦しいから、と本人から
言われたため、普段はみんなユウヒ隊員と呼んでいる。

ユウヒ「お二人とも、こちらに居られたんですね」

アイナ「あ、ユウヒさん。何か御用ですか?」

ユウヒ「そろそろイルマ隊長が出演する番組が始まるので
二人を探してきてくれとホリイ隊員が」

アイナ「あ、そつか。そろそろですね。それじゃあ

オオトリさん、戻りましょうか」

シアン「あ、はい」

ヤシロ隊員の声に我に返つた僕は、慌てて頷くと二人の後に
続いて司令室へと戻つて行つた。

実は今日、とあるテレビ番組にイルマ隊長が出演する事になつっていた。理由としては、怪獣と最前線と戦う部隊の

指揮官だから、というわけだ。

そして、僕達が司令室に戻ると丁度そのテレビ番組が中央の大型モニターに映し出された所だつた。
ナレーション「21世紀。今や我々の生活も大きく変わろうと

しています」

アイナ「あ、やつてますね」

ホリイ「おお、二人も来たか。丁度今始まつた所や」

流れる映像を見つつ、僕やヤシロ隊員、ユウヒ隊員が中央テーブルを囲む席に座つて行く。

その後、女性キヤスターと対談するイルマ隊長を見ながらみんなで雑談していた時だつた。

シアン「ん？あれ、何かキヤスターの人、可笑しくありません？」

レナ「え？」

画面の方に視線を向けていた僕やダイゴ隊員達が気付いた異変。それはキヤスターの女性がまるで幽霊か何かに乗つ取られたような、変な様子になる所だつた。
すると……。

突然キヤスターの女性の体が宙に浮いた。

ユウヒ「なつ!?」

シアン「浮いた……!?」

驚く僕達を後目に、キヤスターの人は話し始めた。

女性「地球はもうすぐ生まれ変わる」

アイナ「え?」

女性「聖なる炎が穢れを焼き払うだろう」

シアン「穢れを、焼き払う?」

シンジヨウ「何言つてんだこいつ?」

テレビの画面を見ながら、僕達は半信半疑でキヤスターの言葉を聞いていた。

女性「キリエル人に従うのだ。その証を見せよう」

と、最後にそう言うと宙に浮いていた女性が倒れ、テレビの画面が切り替わり、『しばらくお待ちください』という単語だけが映し出された。

ホリイ「な、何や今のは」

ヤズミ「演技、だと思いますか?」

レナ「それなら笑い話で済むけど、アイナ隊員達はどう思う？」

アイナ「確かに、レナさんの言う通り演技でした、なら
笑い話で済みますけど、でももしそうじやないと

したら……」

と、話をしていた時。今まさにさつきのテレビ局に居た隊長から
通信が入った。

イルマ『何者かが遠隔的にキヤスターの精神を乗つ取つたと
見るわ。デフコン1の態勢で待機してください』

ムナカタ「了解。気を付けて。……シンジヨウ、ホリイ、

シアン、アイナ、ユウヒの5名は各種装備を携帯の上
1号、SS、MkIIに搭乗用意の上待機』

5人「[――「了解っ！」――]

と、その時。

ヤズミ「ツ！大変です！隊長の居る区域の地震計が異常な

振動を検知しました！」

ダイゴ「え？」

ムナカタ「現場付近のカメラの映像は出せるか!?」

ヤズミ「メインモニターに回します！」

カタカタとヤズミ隊員がタイプをする音がして、
メインモニターに振動で揺れるカメラの映像が映し出された。
と、思った次の瞬間。

『ボオオオオオオンッ！』

市街地にあつたビルの一つが、爆発した。

シアン「び、ビルが、爆発した」

その時司令室に居た僕達9人は、その光景に啞然とする
事しかできず、それが始まりの合図である事を、まだ
知らないのだった。

その後、ハンガーに戻ったイルマ隊長が参謀会議に
出席している中、僕とヤシロ隊員のSS、シンジヨウ隊員と
ホリイ隊員の1号の2機が現場付近に向かつた。

SSを近くの広い場所に着陸させ、未だに炎が燻っている
建物の残骸に近づく僕とヤシロ隊員。

僕はヘルメット脇に装着したCCDカメラで周囲を
撮影しながらPDIを取り出しそれを開いた。

シアン「どうユナちゃん。何か分かつた?」

ユナ『うーん。……TPCのデータベースにある爆発物のデータと照合してみたけど、該当する物は無いね。と言うか、この辺爆発物の反応 자체無いみたい』

PDIの画面に映つたユナちゃんは困り顔で首をひねつた。

人工知能であり人との対話型インターフェースもある

ユナちゃんはこうして現場でも調査に協力してもらうようになった。

とはいっても、それで何かを必ず発見できる訳じやないけど。

アイナ「未知の爆発物なのか。それとも別の何かなのか。

それについても……」

瓦礫の上に立ち、瓦解したビルを見つめるヤシロ隊員。

「爆破されたのが無人の建設中のビルで幸いだつたわね。

これがもし工事中だつたら……」

ユナ『まあ軽く數十人は死んでたかもね』

と、笑みを浮かべているユナちゃん。これには流石の僕も……。

シアン「ユナちゃん! そんな不謹慎な事言っちゃダメでしょ!」

人が死ぬなんて、軽々しく言う事じやないの！」

ユナ『は、はうい。ごめんなさい』

と、僕の声にびっくりしてから頭を下げるユナちゃん。

シアン「うん。分かつてくれれば良いよ。これからは

気を付けてね』

そう言つて笑みを浮かべると……。

ユナ『うん！ 分かつた！』

彼女も笑みを浮かべてくれた。

というか、ホントにユナちゃんは人間みたいだ。

そう思つた後、気持ちを切り替えて現場の調査に戻る
僕達だった。

結局、爆発物に関する反応は何一つなく、僕とヤシロ隊員は現地にシンジヨウ隊員達を残しダイブハンガーへと帰還した。結局、僕達の見解としては爆発物ではない『何かの力』を『何処からか加えた』が為にビルが崩壊したと言う事になつた。

ダイゴ「力、か。けど一体どこから」

レナ「現場に何か、可笑しな発生装置みたいなものとかつて

無かつた?」

シアン「はい。消火作業後に瓦礫の下までをスキヤナーで一通り調べましたが、特にこれと言つてビルの崩壊させる事が出来るような資材の欠片はありませんでした」

ムナカタ「となると、何等かの時限装置が稼働した結果、という訳では無さそうだな」

アイナ「はい。一応現地の警察と消防が検分を進めていますが、私達の見て来た限りでは手がかりになりそうなものが出来るとはとても……」

レナ「そう」

ユウヒ「キリエル人を名乗る奴らが警告のために無人のビルを狙つたのか、それとも偶然か」

その時、顎に手を当てたユウヒ隊員の言葉にその場にいた僕達の視線が彼女に集まつた。

ムナカタ「何が言いたい?」

ユウヒ「あの時、キャスターの女性を介して奴らは言いました。

浄化の炎が穢れを焼き払う。その証を見せる、と

シアン「まさか。あの無人ビルを狙つたのはその証?」

ユウヒ「無論確証はありません。しかし、何の予兆も

無い破壊活動が市街地で行われようものなら……」

ムナカタ「建造物、人的被害がどれほどになるか。見当も

付かない」

苦々しい顔で最悪のシチュエーションを考えるムナカタ副長。
そうだ。もしあの力が、人が住んでいる人口密集地の
マンションに向けられよう物なら……。

その先を考え、僕もゴクリと唾を飲み込む。

ヤズミ「あの力の事、急いで解明する必要がありそう
ですね」

ヤズミ隊員の言葉に、その場にいた僕達は無言で頷いた。
シアン「爆発物以外でビルを倒壊させる力か。……あれ?」

そう言えばイルマ隊長は?」

と、その時僕は隊長が部屋、司令室に居ない事に気付いた。
ムナカタ「昨日のテレビの一件以降会議やなんやらで

忙しかつたからな。今は自室で休んでいるはずだ

その後も僕達は司令室でデータの解析を行つていたその時。イルマ『キリエル人はどこから来たの?』

シアン「え? この声、イルマ隊長?」

不意に司令室に隊長の声が響いた。恐らく隊長室にある通信機の者だろうけど、キリエル人つてまさか……。

「まず自己紹介をするのが筋つてもんじやないかしら?」

?? 「はつはつは。流石GUTSの隊長だ。ユーモアがある」ツ!誰の声だ? 隊長室に、イルマ隊長以外の人が居る?

その時、驚く僕達にムナカタ副長が領き、僕とヤシロ隊員、ユウヒ隊員、ダイゴ隊員、レナ隊員の5人が武装、GUTSハイパーを手に司令室を飛び出し隊長室へと向かつた。

ユウヒ「なぜこの厳重な警備のダイブハンガーに部外者が!」

アイナ「何の予兆も無くビルを吹つ飛ばす相手です! こここのセキュリティーを突破して侵入したとしても、

可笑しくは……!」

シアン「とにかく隊長が心配です！部屋に急ぎましょう！」

叫びながら、僕達は隊長の部屋を目指した。

そして、僕達5人は部屋の前までたどり着くとそれぞれGUTSハイパーを取り出し、安全装置を解除。扉の脇に立ち、互いに頷く。

と、その時突如として部屋の扉が開き、僕達は驚きつつもハイパーを構え周囲を囲んだ。

しかし、飛び出して来たのはイルマ隊長だけだった。

「イルマ隊長!？」

慌てて銃口を下げつつ、僕とヤシロ隊員、ユウヒ隊員は部屋の中に侵入し、僕は自動ドアを背中で押しながら部屋の中に向かってGUTSハイパーを構え、他の二人が突入するけど中には誰も居なかつた。

ユウヒ「クリア」

息を付き、ハイパーの銃口を下げるユウヒ隊員とヤシロ隊員。その時だつた。

イルマ「K—1地区！」

不意に叫び、駆け出したイルマ隊長。その慌てぶりから、何があると考え僕達も急いで隊長に続いた。

「ヤズミ隊員！ デフコン4の警戒態勢！」

1号機をK—1地区へ！」

そして、司令室に戻った隊長は矢継ぎ早に命令を飛ばし、更に現地の映像を中央モニターに映し出した。

K—1地区は完全な人口密集地だ。昼間と言う事もあり車の通りも多い。完全な都心と、その時。

『ピカツ！』

ビルの地面辺りが光つたかと思つた次の瞬間。

『ドオオオオオオンツ！』

ビルが内部から爆発した。

周辺一帯を爆炎が覆い、道を行く車に瓦礫の雨が降り注ぐ。盛大な爆発が、地区一帯を覆う。

シンジヨウ 『ビルの中には多数の市民が居た模様！ 被害は、被害は甚大です！』

現場の燃え盛るビルの残骸がモニターに映し出される。

これが、これが浄化の炎だと？

ふざけるなっ！あのビルに、どれだけの人が生活していたと思つてゐる！どれだけの人の命が……！！！

そう思いながら、僕はギュッと拳を握りしめるのだつた。

となりで、同じように唇を噛みしめるヤシロ隊員や

モニターに鋭い視線を向けるユウヒ隊員に気付かぬまま。

その後、僕達はあの正体不明の攻撃の解析を続けた。しかし

攻撃の正体は未だに分からず、煮詰まつていた僕は頭を冷やすためにお手洗いへ行き、そこで顔を洗つてから司令室に戻ろうとした。のだけど……。

あれ？

その時ふと、僕は私服姿で地下の駐車場に向かう姿を見てしまつた。こんな時にどこへ？と思いつつ僕は隊長を追つた。

そして僕が駐車場に辿り着いた時には、イルマ隊長は私物の車で日本本土と繋がつて いるシークレット・ロードへと丁度出て行く所だつた。

と、そこへ……。

ダイゴ「シアン」

シアン「あ、ダイゴ隊員」

後ろからダイゴ隊員が現れて声を掛けられた僕は振り返った。

ダイゴ「今出て行つた車、イルマ隊長が？」

シアン「え、ええ。私服姿でどこかへ。けど、こんな時に
一体どこへ……」

ダイゴ「……追つてみよう」

シアン「え？」

ダイゴ「もしかしたらキリエル人に関する手がかりを掴んだ
のかもしれない。シアン、GUTSハイパーと

PDIは？」

シアン「ちゃんと携帯しています。……つて、まさか……！」

ダイゴ「もし仮に、イルマ隊長の向かつた先にキリエル人が
待ち構えていたとしたら、イルマ隊長が危ない。

すぐに追うぞ！」

シアン「は、はいっ！」

その後、僕はダイゴ隊員が運転する車に同乗し、急いでイルマ隊長の後を追つて行つた。

一方そのころ、GUTS司令室ではアイナやユウヒ達が知恵を出し合いあの攻撃の解析を行つていた。

今、司令室では私やユウヒ隊員、他のみんなが意見を

出し合い色々探つていたけど、まだわかりそうになかった。

そんな時だつた。

ヤシロ「あの攻撃の前兆は、360度どの方向からも検知できて

いません」

ユウヒ「まさか、攻撃自体が透明なのでは？」

ホリイ「せやけどそれなら熱探知とかに引っかかるはずや」

そんな事を考えていた時。

ユナ『ねえねえ、ちよつと良い？』

と、急に大型モニターにユナちゃんが姿を現した。

ヤシロ「何？どうかしたのユナちゃん」

ユナ『あのね、お母さんに言われてさつき攻撃の時の震度計のデータを見てたんだけどね、変なの』
変? どういう意味だろう?

ヤシロ「変つて、何が?」

ユナ『普通地震つて波でしょ? 大陸のプレートの振動が地震の元だけど、当然波は小さくなつて段々大きくなつて、また小さくなるでしょ? でもあの攻撃の時の地震つて目一杯大きくなつた後すぐに消えちやうの。これつて普通の地震と違うよね?』

ツ! もしかして……!

アイナ「ヤズミさん! 2回目の攻撃の時つて、地震は

観測されますか!?」

ヤズミ「待つてください。……これはつ! はい!

確かにヤシロ隊員の言う通り、地震は確認

されています! と言う事は、まさか……」

ユウヒ「地下からの攻撃。そう言う事ですか……!」

ホリイ「じゃああの地震は、攻撃が地下から地表に向かう

時の振動つちゅう事か！」

ムナカタ 「と言う事は、これから攻撃も……！」

アイナ 「奴らの居るであろう地下から、地表のいづれかに
向けて放たれるでしよう」

こうして、私達はようやく敵の攻撃を突き止めた。
つて、あれ？ そう言えば誰かを忘れてるような……。

ああっ！

「そう言えば、隊長とダイゴさん！ それにオオトリさんは!?」

レナ 「あれ？ そう言えば姿が見えないわね」

3人が居ない事に気付いた私は、オオトリさんのPDIに
通信を入れた。

アイナ 「ちょっとオオトリさん。今どこに居るの？」

シアン『すみません。連絡が遅れましたが今僕とダイゴ隊員は
市街地に向かってます』

アイナ 「え？ 市街地に？」

私が声を漏らすと周りのみんながこちらを向いた。

シアン『今僕達はイルマ隊長を追っています。恐らく隊長は

キリエル人に関して何かを掴んだのかもしません。

これから僕達は隊長に追いついて援護をしたいと

思います』

ムナカタ「ヤシロ隊員、少し貸してくれ」

そう話していた時、ムナカタ副長がPDIを貸してくれ、
と言つたので私は渡した。

「ムナカタだ。一人とも、イルマ隊長を頼むぞ」

シアン『はいっ！』

その返事を最後に、通信は途切れ僕達は攻撃に対処するための
話し合いを始めた。

そんな中で私は……。

お願ひ。二人とも、どうかイルマ隊長を守つて。

私は、秘かにそう願い祈るのだつた。

／＼＼

イルマ隊長の車のGPS信号を追つて僕とダイゴ隊員の車は
市街地のマンションの一角に到着した。

そこから更にイルマ隊長のPDIの信号を追つて、そのうちの一室の前に辿り着く僕達。

そして、その玄関の前に立つと僕達はGUTSハイパーを取り出した。互いの玄関の左右に立ち、ハンドサインで僕が先に突入する事を伝えると、扉をダイゴ隊員が開け、僕が先に突入した。

そして、そのまま各部屋を静かに確認しながら奥の部屋の前まで進んでいくと、声が聞こえた。

??? 「……來ていたのです」

何やら聞こえる声を耳にした僕はダイゴ隊員に頷くと、声がする
部屋のドアを静かに開き、中の様子を見ると、男と、
何かの力で捕らえられているのか、壁に貼り付けられた状態の
イルマ隊長を見つけた。

そして、隊長の危機を悟った僕は考えるよりも先にドアを蹴破り部屋へと侵入した。

男がその音に振り向くが、こっちの方が早い。

『ビシュッ!!』

僕のGUTSハイパーが男の胸の中央を撃ち抜いた。だが。

『シユウウウ……』

シアン「えつ!?」

男の体はまるで煙のようになり、消えた。

イルマ「あつ」

驚き僕が周囲を警戒する中、床に落ちたイルマ隊長に駆け寄るダイゴ隊員。

イルマ「ありがとう二人とも。助かつたわ。けど、どうして、ここへ」

シアン「僕が、隊長がダイブハンガーを出て行くところを見たんです。近くに居たダイゴ隊員の提案で二人して

万が一を考え、それで

イルマ「そうだつたの。ありがとう

と、その時。

???「最後の予言を語ろう」

何処からともなく声が聞こえてくる。

ダイゴ「最後?」

シアン「それは一体どういう意味!?」

イタハシ 「あなた達が生きて聞く事のできる最後の、
という意味だよ」

僕が叫ぶように問い合わせ返すと、後々知った名前だけど、
イタハシと言う男の声が響いた。

「次に聖なる炎が焼くのは、ここだ！」

ツ！それじゃ！

ダイゴ 「何だつて!?」

このままここに居ちや不味いっ！

シアン 「ダイゴ隊員！イルマ隊長と外へ！後、司令室への
通信をお願いします！僕はこのマンションの人々に
避難誘導を！」

ダイゴ 「わかつた！隊長、行きましょう！」

イルマ 「ええ。オオトリ隊員、無茶だけはしないでね」

シアン 「はいっ!!」

返事をすると、僕はイタハシの部屋を飛び出し、通路に
あつた非常用ベルを鳴らした。

「こちらはGUTSの者です！このマンションに

お住まいの方全員にお知らせします！現在

このマンションには爆発の恐れがあります！

皆さん、必要最低限の貴重品だけを持ち、

即刻このマンションから離れてください！」

僕は叫ぶように、マンション全体に響くスピーカーに向かつて警告を飛ばした。

そして僕はそのまま、マンションから逃げる人々の誘導を開始した。

市民「まさか、この前の爆発事件みたいに……」

「ほら！ 急いで！」

マンションに住んでいた人たちが、老若男女、様々な姿で飛び出してくる。

「ママ待つて！ まだお家にクマさんが！」

「そんなの良いから！」

そして、その中には子供の姿もあつた。

2件目の事件の被害者名簿の中には、小さい子供の名前だつてあつた。

もう、二度とやらせない！物は壊れたつて直せる！けど人の命は！

そう思いながら、僕は歯を食いしばり、避難誘導を続けた。と、そこへ、携帯していた無線機に通信が入った。

アイナ『オオトリさん、聞こえますか？今、あの攻撃を

阻止するためにポイント33上空から地上に

マイクロウエーブ砲を照射します』

シアン「ツ！待つてください！周辺住民の避難がまだ

完了していません！」

アイナ『そんなつ！避難を急いでください！』

レナ『急いで！攻撃はそのワンチャンスしかないの！』

シアン『了解つ！皆さん！ここは危険です！遠くへ！

少しでも遠くへ避難してください！』

と、そこへ……。

ダイゴ「シアンつ！」

シアン「ダイゴ隊員？！イルマ隊長は？！」

ダイゴ「隊長はマンションに残つて中から避難誘導を

している…ここは俺が受け持つからお前はもつと

先を頼む!』

シアン「は、はいっ! 皆さん! こっちへ! こっちへ避難してください!」

そう叫びながら僕はポイント33とマンションから離れるように住民を誘導していった。

そして、ダイゴ隊員の避難完了の報告を受けると1号が攻撃ポイント上空にスタンバイモードで移動していった。上空ではさらに2号、SS、MkⅡが待機している。

その時。

アイナ『オオトリさん! 乗って!』

避難する人を逃がし終えた僕の近くの大通りにSSが着陸し、僕は急いでSSの後部シートに搭乗するとシートの上に置かれていたヘルメットを装着。

ガンカメラの映像でマンションの方へとカメラを向けたのとほぼ同タイミングでマイクロウェーブ砲による攻撃が行われた。

と、その時。

『ビカツ！』

突如として光と共に、ウルトラマンティガが現れた。そして、ティガはその手に保護していたイルマ隊長を近くの安全な場所に置いた。

アイナ「イルマ隊長！良かつた。ご無事で」どうやら、逃げ遅れていたイルマ隊長をティガが助けたようだつた。

その事実に僕やヤシロ隊員が安堵していた時。

イタハシ「君を待つっていたのだよ、ウルトラマンティガ！」不意にどこからかあの男の声が聞こえて来た。ガンカメラを操作すると、僕は路上に立つあの男の姿を捉えた。

「君はこの星の守護神になるつもりかね！」

おこがましいとは思わないか！」

おこがましい？……ふざけるなっ！」

ガンカメラを操作するレバーを握る手がカタカタと震える。

「君がその巨大な姿を現すずっと前からこの星の

愚かな生き物たちはキリエル人の導きを待つて
居たのだよ』

愚か、愚かだと？何が導きだ。大勢の命を奪つておいて、
淨化だの導きだの。ふつざけんなあつ!!!!!!
ブチツ!!!

その時、僕の中で何かが切れた。

「君は招かれざる者なの——」

シアン『招かれざる者はそつちだバカヤロオオオオオツ!!!!!!』

文字通り、キレた僕はスピーカーの音量を最大にして
キリエル人に向かつて叫んだ。

その音量に、ティガも驚いてSSの方を向いてるが今は
関係無い。

『良いかこのキリエルだかカマキリだか知らねえ

怪人が！その腐つた耳でよく聞く聞きやがれ！

こちとら誰もキリエル人の導きなんぞして欲しく

もねえんだよ！それを勝手に導くだあ！？

そつちこそなんだ！地上最強生物にでもなった

つもりかああ!? 良いか聞けクソキリエル人!

俺達はなあ、誰もテメエらなんか必要としてねえんだよ
分かつたかこの大量殺戮者があつ!!!

大勢の命奪つておいて、今更聖人なんざ気取つてんじや
ねえよコラアツ!!』

と、僕はその時胸の中に溜めていた怒りを文字通り吐き出した。
そして、普段の僕からのあまりの代わりように、ヤシロ隊員を
始めみんな目をぱちくりさせている。

アイナ『えく嘘く。どうしちゃつたのオオトリさん。こんな
キヤラだつたつけく』

と、僕のあざかり知らぬところで戸惑つていたヤシロ隊員。
しかしまあこの時の僕は頭に血が上つていた訳で……。

シアン「アイナっ!」

アイナ「ひや、ひやいつ!?」

シアン「俺を今すぐ下ろせ！あのイカレ聖人！俺がGUTS
ハイパーで叩きのめしてやる！」

アイナ「そ、そんな無茶な！」

未だに頭に血が上っている僕と、なぜか涙目のヤシロ隊員。と、その時。

イタハシ「何と愚かな。やはりこの世界は我々キリエル人が導くべきなのだ！ウルトラマンティガ！そしてGUTSの者共よ！見よ、これがキリエル人の

怒りの姿だ！」

すると、地面に亀裂が走つたかと思うとそこから炎が噴き出し、その炎の中から、何と巨大な人型、ティガと同程度のサイズの巨人が出現した。

驚くホリイ隊員。それを司令室から見ていたムナカタ副長たち曰く、挑戦するために巨大化したとの事。と、その時。

『ヒュヒュヒュヒュヒュンッ！』

『ドガガガツ！』

『キリツ!?』

何処からともなく銃弾の雨が降り注ぎ、ティガと向き合っていた巨大なキリエル人、キリエロイドに命中し火花を散らした。

僕達がそちらを向くと、そこには……。

ユナ『おつまたせ～！ 3式機龍あ～んどうナ！ ただいま到着！』
両腕に武装らしき物を装備した3式機龍がVTOVL4機に運ばれて
来た。

シアン「ユナちゃん！」

ユナ『お待たせ～シアン！ お母さんがもしもの場合のために
行つてきなさいって言うから来ちゃつた！』

カシムラ博士！ グツドタイミングです！

そう思いながら僕は鍵となつてゐるPDIをスロットに
装填しモニターを上から引き下ろし、そして現れた操縦桿を
強く握りしめた。

《3式機龍、アクティベート》

ユナちゃんの電子音が響く。

こうなつたら、徹底的にやつてやる！ あいつをぶつ飛ばして
やる！

そう思いながら、僕は切り離された機龍をティガの隣に
着地させ、機龍のスピーカーをオンにした。

シアン『ウルトラマンティガ！一緒に戦つて欲しい！

あいつと一緒にぶつ飛ばそう！』

僕がそう言うと、ティガは頷き、構えた。

「レナさん達は隊長の救出を！」

ホリイ『お、おう！』

ユウヒ「では、私とヤシロ隊員は……！」

アイナ「ティガと機龍の援護ですね！！」

と、二人もまた命を簡単に奪うキリエル人に対して燃やしていた怒りを爆発させるように、攻撃態勢に移った。

最初に仕掛けたのはティガだった。

足払いをするティガの足を、ジャンプして回避するキリエロイド。しかししそのがら空きの側面に、急造とはいえ追加された3式機龍の射撃武器、『0式レールガン』の攻撃が命中した。

それによつて、動けない空中でバランスを崩し、地面に膝をつく
キリエロイド。

『タアツ！』

そして、その隙に胸を蹴とばすティガ。蹴とばされ、

ズズンと音を立てて倒れるキリエロイド。
そこへ……。

ユウヒ 「怒れる者が一人だけと、思うなよ！」

アイナ 「私達だつて、怒つてるんだからねつ！」

『バシュバシュツ！』

『バババババツ！』

その時、倒れたキリエロイド目掛けて Mk II のレーザーと SS のバルカン砲が放たれ、倒れたキリエロイドの

周りで無数の火花が散つた。

しかしすぐさま起き上がつたキリエロイドは、鈍重な機龍を標的にすると真っ直ぐ向かつて來た。咄嗟にレールガンを連射するけど、キリエロイドはそれを飛び越え、3式機龍の背後を取つた。そのまま奴は周り蹴りを繰り出そうとしたが……。

『タアツ！』

『ドガツ！』

『キリツ!!』

注意が逸れていたキリエロイドを今度はティガが蹴とばした。

今度は転がつて態勢を立て直すキリエロイド。しかし
そこに今度は機龍のレールガン、SSのバルカン砲、
Mk IIのレーザー砲が一斉に発射され命中。如何に単発の
威力が低くとも合わさつたその威力は高く、奴を再び
地面に倒した。

その時、倒れたキリエロイドに掴みかかつたティガは
キリエロイドの腕を掴んで振り回し始めた。そして、
一瞬だけティガは3式機龍の方を向いた。
そつか！

シアン『よしつ！ 来いつ！』

その意図を理解した僕は機龍のスピーカーを
通して叫んだ。
すると……。

『ダアツ！』

ティガが全力でキリエロイドを3式機龍めがけて
投げ飛ばした。

地面の上を自力で止まれずにどたどたと走るキリエロイド。

そして、奴が3式機龍に近づいた次の瞬間。

ユナ『行つけえええええつ！』

『ゴガアアアアアンツ！』

ユナちゃんの叫びと共に全力の右ラリアツトを奴の腹部
目掛けて繰り出し、そこから更に腹を持ち扱い上げるように
してキリエロイドを空中で一回転させた。

『ドガアアアアアンツ！』

そして、そのまま背中から盛大にビルに突っ込むキリエロイド。

『キ、キリ……』

だけどそれだけじゃない。僕は機龍を操作し、キリエロイドの
腕をがつしりと掴み、後ろに手を回して捕まえた。

シアン『今だ！ テイガ！』

僕がスピーカー越しに叫ぶと、テイガは動けないキリエロイドに
接近しその腹部にラッシュを叩き込んだ。

何とか足で反撃するキリエロイド。しかしテイガはそれを瞬時に
察し後ろに飛んで回避。僕の操る機龍はキリエロイドの手を
離すとその背中に思いつきリショルダー・タックルをかました。

ヨロヨロとさつきみたいに前に進んだキリエロイド。そこへ
ティガが飛び込んできて、キリエロイドの頭を掴むと
自分の体ごと奴を倒し、後頭部を地面上に叩きつけた。

ドガアアンツ、という盛大な音と共に砂煙が巻き起ころ。

そこから、前転して距離を取るティガと、ヨロヨロと立ち上がる
キリエロイド。しかしそこに、有無を言わさず機龍、SS、
Mk IIの一斉射撃が襲い掛かる。

ちなみに、これを見ていたホリイ隊員は……。

ホリイ「何や、凄まじいリンチやな！」

そんな叫びが通信機越しに聞こえて来たけど、僕は無視して
キリエロイド目掛けて機龍を前進させた。そして……。

シアン「これは、お前達の身勝手に巻き込まれた人たちの分！」

『ドガッ！』

フラフラと立ち上がったキリエロイドの胸に機龍のクロ一が
突き立てられる。

「これは、お前達に殺された人の分！」

もう一撃、機龍の爪がキリエロイドの皮膚を切り裂く。

胸を押さえ、呻きながら数歩後ろに下がるキリエロイド。

「そしてこれが、そんなお前達への、俺の怒りの一撃だあああああつ!!」

『バシイイイイイツ!!』

両腿のスラスターを使つて機龍の体を回転させ、鋼鉄の尻尾を叩きつけた。再び吹つ飛ばされ、背中から地面に倒れるキリエロイド。

既に奴の体はボロボロだ。一気に決める！

『ウルトラマンティガ！十字砲火だ！』

ヤシロ隊員とユウヒ隊員も！』

アイナ「はいっ！」

ユウヒ「承知っ！」

スピーカーを通した僕の声にティガは頷くと

立ち上がるとしているキリエロイドの真正面に

立つた。

更に左右をSSとMkIIが包囲。後ろには3式機龍が立つた。

そして……。

『フツ！』

腕を交差させるポーズを取り、ティガが必殺技の光線を放つのに合わせ、僕の操る機龍のレールガン、SSのバルカン砲、Mk IIのレーザー砲が放たれた。

そして、ダメージで回避も防御も出来なかつたキリエロイドにそれら4つの力が命中し、僅かに呻いた次の瞬間……。

『ボオオオオオオンッ！』

盛大な音と共にキリエロイドは爆散した。

そして、ティガは3式機龍に向かつてサムズアップすると、どこかへと去つて行つた。

その後、無事だつたダイゴ隊員も乗せ、基地へと帰還する僕達。

ホリイ『いや。にしてもさつきのシアンの怒鳴り声、

すぐかつたな』

レナ『ホントホント、任侠映画のヤクザみたいだつたわね』

と、通信機からみんなの声が聞こえて來た。

シアン「うつ!? そ、その話はもう良いですよ。あれは僕の

堪忍袋の緒が切れたと言うか、何と言うか……」

ユウヒ『温和な人ほど怒らせると怖い、と言いますが正しく

その通りでしたね』

ホリイ『今後シアンを怒らせない方が良いと思う人、』

レ・ユ・ア『『は、い』』

シアン「だ、大丈夫ですよ！皆さんにはあそこまで怒りません

から～！」

と、アセアセと戸惑いながら僕はコクピットの中で叫び、

その声を聞いたみんなは笑みを漏らすのだった。

また、キリエル人と会い見える日が来るのは、知りもしないで。

第3話 END

エピソード3・5 『戦え機龍』

（前回までのあらすじ）

次第に民衆に知られる事になつていく巨人、ウルトラマンティガ。しかし、そんなティガのニュースの最中に突如としてキヤスターを乗つ取りキリエル人を名乗る生命体が浄化を宣言。その宣言を実行するかのように次々と建物が爆破。1件目は無人のビルであつたため被害はなかつたが、2件目は人口密集地であつたため多数の死者を出した。そんな中キリエル人の手がかりを追うイルマとそれに気づいて後を追うシアンとダイゴ。その後、何とか3件目の爆破を防いだがキリエル人はキリエロイドとなつて出現。キリエル人の言い分に激怒したシアンたちはティガと協力してキリエロイドを撃破するのだつた。

キリエル人の一件が落ち着いた頃。僕達は相変わらずの日々を送つていた。まあ、僕達の仕事は少ないと越したことは無いの

だけど。とか思いつつ、ヤシロ隊員が淹れてくれたお茶を飲みつつ作業していた時、僕はふと時計を見て呟いた。

シアン「今頃、ダイゴ隊員とレナ隊員はモンゴルですか」
そう呟く僕。実際、今のここにはその二人は居ない。
じやあその理由は何かと言うと……。

ヤズミ「逃亡したゴルザの調査ですからね。何か発見があれば良いんですけど」

と、僕の言葉に相槌を打つヤズミ隊員。

ユウヒ「ゴルザ? と言うと、あの黄金のピラミッドを破壊後にティガと戦い逃走したと言う?」

そんなヤズミ隊員の言葉に、あの場に居なかつたユウヒ隊員が首を傾げる。

アイナ「はい。あの戦いのとき、出現した怪獣は2体です。

モンゴルから出現したゴルザと、イースター島から出現したメルバ。メルバはティガと3式機龍の協力で何とか倒せたんですが、ゴルザは地中へ逃亡後に行方を眩ませたままなんです」

ムナカタ 「かといって、実在する脅威を見逃す訳にも行かない
からな。念のため初出現地であるモンゴル平原の
調査が成される事になつた、と言うわけだ」

ユウヒ 「成程。……しかし、怖い物ですね」

シアン 「怖い、ですか？」

不意に呟かれた言葉に、僕は疑問符を浮かべた。

ユウヒ 「皆さんのがゴルザやメルバを目撃するまで、怪獣と言う
存在は実在しないと思われていました。それが今や
当たり前のようになりつつある。平和とはあまりにも
脆く、そして怪獣の力は絶大。どこに現れるかも
分からぬとなると、その事実に少し……」

そう言つて少しばかり俯くユウヒ隊員。

そうか。 そうだよね。

改めて思えば、怪獣はティガのような人知を超えた存在。

3式機龍で倒せない訳じやないけど、それでもその力は絶大で、
ゴルザみたいに地下から現れたり、メルバみたいに空を飛んで
現れたり。人の手に負えない存在が何処から現れるかも

分からぬ。それが怖いと言うのも、僕には分かる。
でも、だからこそ……。

シアン「なら、何とかするまでです」

ユウヒ「え？」

シアン「今の僕達には3式機龍があります。確かに怪獣は手強いし
神出鬼没です。でも、戦えない訳じやないです。相手は
銃弾もレーザーも聞かないお化けじやないんですから、
多分頑張れば何とかなりますよ」

と、この時シアンは彼成りにユウヒを励まそうとしていた。

ホリイ「それに任侠モードのシアンちやんだともつと強くなるし」

ユウヒ「……。ふ、ふふつ」

そこへすかさずなホリイ隊員の一言に、驚いてから笑みを浮かべる
ユウヒ隊員。

シアン「つて、ホリイ隊員良いところなんだから茶々入れないで
下さいよ！後、いい加減任侠モードはもう良いですか！」
と、僕は涙目でその事を訴えるのだった。
ちなみに……。

ユウヒ「《相変わらず》、あなたは優しいですね」

シアン「? ユウヒ隊員、何か言いました?」

ユウヒ「いいえ、何も」

と、首を振つて否定したユウヒ隊員。今何か聞こえた気がした
んだけど、気のせい? まいつか。

と、そう考えながら僕は仕事に戻つた。

その後、僕とヤシロ隊員はユナちゃんとカシムラ博士に呼ばれて
3式機龍のドツクへと向かつた。機龍の格納庫が見渡せる
管制室に入る僕達。

レイコ「あら、来たわね。待つてたわ」

シアン「失礼します。今日はどういった話なんですか?」

レイコ「大した話じやないんだけど、機龍に武装を追加した
からその説明をね」

と言うと、近くに居たオペレーターの人に声をかける博士。
すると丁度管制室から見える機龍の口が開いた。

よく見ると口の中にバラボラみたいなものがあつた。

シアン「博士、あれは?」

レイコ「あれは『2連装メーサー砲』。元々は防衛軍が存在した時代に日本の技術廠で研究されていた物を今の技術で発展改修したものよ。指向性エネルギーである

メーサーの力で敵怪獣の細胞を焼き払うための物よ」

シアン「なんだか、聞いてるだけでも物騒な武器ですね」

本来は、救助用に作られたはずなのに。

僕はそう思いながら3式機龍を見つめた。

レイコ「仕方ないわよ。世界各地で怪獣が目撃され始めた今、人類には怪獣と対等に戦えるだけの力が求められているの。あの巨人、ティガだつたかしら？お偉いさんや一部の人にとっては、ティガと言う存在を完全に信用している訳でもないだろうし、仮にもティガが出現しない場合も含めた戦力が、私達には必要なのよ」

と、そう言つて自論を語るカシムラ博士に、僕とヤシロ隊員は何も言えなくなるのだつた。

その後の昼食時。僕はヤシロ隊員、ユウヒ隊員と一緒に食堂で昼食を取つていた。

そんな時だった。

シアン「怪獣、かあ」

僕は一人、スプーンでカレーをいじつていてそう呟いた。

ユウヒ「どうかされましたか？」

シアン「ああ、いえ」

と、独り言に質問を返されたのでちょっと慌てて返す僕。

「……ユザレ、あのホログラムの言つている事が

正しければゴルザとメルバの出現は大異変の前触れ、
らしいです」

ユウヒ「ユザレ。……私が配属される前に皆さん見たと言う？」

アイナ「はい。地球星警備団団長ユザレ。つて、その名称が

本当かどうかは分かりませんけど、発見された

タイムカプセルから出て来たホログラムの事です。

ゴルザとメルバの出現の予期、ティガの存在の示唆。

大異変を象徴するような各地での怪獣の出現。

そのすべてを言い当てたホログラムですよ」

ユウヒ「そうでしたか。……オオトリ隊員はそれが何か？」

シアン「その。……僕は元々未知への興味からGUTSへ

入隊したんです。男として、探求心の表れ、みたいな感じで。……けど、今の僕達って防衛軍の軍人と

やつてる事、やろうとしている事が変わらないんだなって

思つて、少し……」

ユウヒ「そうですか。……しかし、それでもまだ良いと思います」

シアン「え？」

ユウヒ「市政の人々には我々のように怪獣と戦う術がありません。

一度怪獣が市街地に現れたならば、逃げ惑う事しか

出来ません。そう言う意味では、力を持つ私達には

人々を護るために戦う義務があると私は思います」

……力を持つ者の義務、かあ。けど、今にして思えば、僕が

GUTSに入つたのは未知への、新しい事への探求心だった。

それが今や……。ハア、悩むなあ。

そう思いながら、僕は視線を下の落とすのだった。

その後、食事を終えた僕は一人シユーテイングレンジで

GUTSハイパーを使つた射撃訓練をしつつ、ユウヒ隊員の

言葉を思い返し、その意味を考えていた。

戦う事、守る事は力を持つ者の義務。

その言葉の意味は分かるけど、僕自身は戦いたいからGUTSに入った訳じゃない。いや、強くなりたいって思いは違わないけど、それは戦いたいからじゃない。ここに来たのは、色々な物を、まだ知らない世界を見たいからでもあった。

けど……。ユウヒ隊員の言っている事も分かる。

シアン「……ハア。ダメだ」

全く集中できなかつた僕はゴーグルとヘッドフォンを外してGUTSハイパーを戻した。

結局、考えても答えはあんまり出ず、夜。僕は自室に居る時もどこか悶々としていた。

そんな時だつた。

ユナ「シアンく。お話しよ」

そう言つて、部屋の壁に埋め込まれた通信用の端末が開いてそこからユナちゃんが映し出された。

シアン「あ、ごめんユナちゃん。今日はちょっと考え方

したいから

ユナちゃんの声に気付いて、僕は体を起こしてそう言ったの
だけど……。

ユナ「え？ そんな」

と、しょんぼりした様子のユナちゃん。

うう、ちよつと罪悪感が……。あ、折角だから……。

シアン「ユナちゃん。やつぱりお話する？ 僕も、ちよつと

聞いてほしい事があるんだ」

ユナ「え？ 良いの！ わかつた！ ジヤあお話しよつか！」

と言うと、通信端末からユナちゃんが消えて、僕のPDIが
震えた。それを開くとそこにユナちゃんの姿があつた。

PDIを机の上に置く。

「それで、どんなお話するの？」

シアン「うん。実はその、相談なんだけど。僕今、悩んでるんだ」

ユナ「へ？ シアンに悩み事？」

シアン「うん。……僕は元々、軍人だつたお父さんに憧れていた。

そのお父さんに言われて、強くなろうつて決めた。

色々頑張つて、色んなことをしていただんだけど、

高校卒業を控えたある日、GUTSからの誘いを
貰つたんだ。……けど、僕は今の今まで、こんな風に

怪獣と戦う事になるなんて、夢にも思つてなかつた。

GUTSに入つたのは、新しい事への探求心、

だつたんだ。だから、怪獣と戦う事が、自分の

やりたい事なのかなつて、思つて。悩んでるんだ」

ユナ「えっと、つまりシアンは怪獣と戦いたくないの？」

シアン「……そうまでは言わないよ。必要な事だとは

思つてる。けど、こういうのには人命が掛かつてゐるから。

GUTSの隊員だから、とか生半可な覚悟で臨みたく
無いんだ」

ユナ「そういう物なんだ。……ううん、だつたら今を

頑張ればいいんじやないかな？」

シアン「え？」

腕を組み、首を傾けてからのユナちゃんの言葉に、僕は疑問符を
漏らした。

ユナ「シアンつて、もつともうつと、色んな新しい物を見て見たいんでしょ？」

シアン「う、うん。まあそうだね」

ユナ「じゃあ、その新しい物を見るために怪獣なんて

コテンパンにぶつ飛ばして、平和な世界にすれば

良いんだよ！」

と、ボクシングみたいな動きと共に笑みを浮かべながら教えてくれるユナちゃん。

「そうすれば、シアンもゆっくり探し物が出来るでしょ？」

その言葉に、僕は少しハツとなつた。

「どうすれば、シアンもゆっくり探し物が出来るでしょ？」
そうか。そうだよな。この戦いを、怪獣と人間の戦いを一日でも早く終わらせる。僕には、僕達にはその力がある。

この力で、戦いを終わらせて、また平和な世界を取り戻す。
そして、僕の望んだ未来のために、今ここで戦う。

そうか。それもありだよな。

シアン「ありがとうユナちゃん。吹つけられたよ」

ユナ「ホント？ ユナ、シアンの役に立てた？ 偉い？」

シアン「うん、偉い偉い」

ユナ「えへへへ。やつた。ユナ褒められた！」
と、ユナちゃんが画面の中で喜んでいる姿を見て、僕も
笑みを漏らすのだった。

そして翌日。事件が起こつた。

シアン「駿河湾沖の海底で、動く震源、ですか？」

イルマ「ええ。本日未明、静岡県の沿岸部に設置された震度計が
僅かな振動を検知したわ」

そう言うと、ヤズミ隊員の方に頷くイルマ隊長。それに頷き返した
ヤズミ隊員がキーボードを叩くと、前方の大型モニターに
震源を現す点が打たれた画像が映し出された。

ムナカタ「本日午前4時過ぎ、静岡県伊豆半島の南西数十キロの
地点で最初の振動が検知された。その後も定期的に
振動が検知され、データをもとに震源を割り出すと、
震源は徐々に太平洋から駿河湾方面へと移動している
事が分かつた」

ユウヒ「地中を移動する怪獣。……まさかゴルザ、ですか？」

ムナカタ「不明だ。しかし、ゴルザではないという確証も無い。

そこでTPC本部は俺達GUTSに出撃を命じた。

俺達は駿河湾にてこの移動物体の迎撃作戦を行

う」

シアン「ツ、迎撃」

と、すぐに表情を引き締めるシアンやアイナ、ユウヒなホリイ達。

ムナカタ「3式機龍及びガツツウイングSSは海岸線で待機。

敵怪獣の出現に備える。ユウヒ隊員はMkIIで。

シンジヨウ、ホリイの両名は俺と共にガツツウイング2号による周辺の索敵を行う」

ユウヒ「了解」

ホリイ「あの、ダイゴ達は?」

ムナカタ「残念だが、今からではモンゴルから戻つてきてもらう

余裕が無い。TPCの地震観測センターによる計算では

残り数時間で目標が駿河湾内に到達する。それを阻止する

為にも、二人の帰還を待つて居る余裕はない。

以上だ。各自、出動準備!」

そう言わると、僕達はヘルメットなど手に司令部を飛び出した。ヘルメットを被り、ヤシロ隊員と共にSSに搭乗。2号、MkIIに続いてダイブハンガーを発進した。

そして、そんな僕たちの後を、4機のVTOLに吊るされた3式機龍が少し遅れて続く。

その様子をガンカメラで見ていた時、僕はふと、

『ウルトラマンティガ』が現れるのだろうか? と言う不安にかられた。

僕はそんな考えを、頭を振りながら否定しつつ、任務に意識を戻した。

そして数十分後。

駿河湾に到着した機龍が着水するのをガンカメラで確認しながら最新式に換装されたレーダーに目を向けた。

幸い、と言うべきか主だつた動体反応や生体反応は無い。地中レーダーも機影などは無し。

それを確認した僕は2号とMkIIへデータリンクを形成した。データリンクとは、レーダーなどの換装に合わせて実装された

システムで、友軍機とデータを共有するための物だ。これによつて例えは2号が敵を発見すると、敵の場所や様子等がほぼリアルタイムで確認できるシステムだ。

シアン「こちらガツツウイングSS及び3式機龍。

現在予定ポイントで待機中。周辺の異常なし。

そちらの様子はどうですか?』

ムナカタ『こちら2号ムナカタ。こちらも特に異常なし』
ユウヒ『同じくMkII。こちらも現海域ではこれと言つた

怪獣出現の兆候は見られず。引き続き監視を続行します』

シアン「こちらシアン、了解。こちらも警戒を続けます』

そう言うと、僕は通信を切つた。

既に3式機龍はアクティベート、起動状態だ。いつでも戦える。

今の武装は、両腕のレールガンと口の2連装メーサー。

メーサーはこれが初めてだから、怪獣に効くかどうか……。
と、そんな事を考えていた時だつた。

『ビーツ・ビーツ!』

唐突に警報が聞こえて来て僕は操縦レバーを握り直した。

ムナカタ『こちら2号！現在駿河湾内の海底を移動する

巨大物体の影をレーダーで捕捉！シアン！

そつちに向かってるぞ！注意しろ！』

シアン「了解つ」

副隊長の報告に、もう一度レバーを握り直す僕。

数秒後、3式機龍に内蔵されたセンサーが微弱な振動を検知。次第にそれは大きくなっていた。そしてSSの地中センサーも移動物体を捉えた。

ユナ『移動物体確認。深度、50、45、40。シアン！浮上

してくるよ！』

シアン「見たいだね……！」

そう呟きながら、モニターを見つめる僕。と、その時。

『ザツパアアアアアアアアアンッ！』

突如として巨大な水柱が現れた。空中に飛散する海水。

と、その海水の柱の奥に、黒い影が見えた。そして、

海水が重力に逆らつて落ちて行つた時、僕達の、正確には

3式機龍の前に怪獣が現れた。

『GIAAAANN!!』

シアン「来た……！こちらSS及び機龍！怪獣を視認！」

現れたその怪獣は、特徴的な頭に、多層構造にも見える背中。腹部には規則正しく一列に黄色い模様が縦に並んでいた。

にらみ合う怪獣と機龍。そこに本部から通信が届いた。

イルマ『オオトリ隊員。以降あの怪獣をグロツシーナと

命名します。グロツシーナの力が未知数である以上、

都市部への侵攻は避けたいわ。出来るうる限り、

水辺で進行を阻止して。後ろの街は既に避難警報が

発令されているけど、気を付けて』

シアン「了解。……行くよ、ユナちゃん」

ユナ『OK～！レツツ、ゴー!!』

通信機越しにユナちゃんの声を聞いた僕は、すぐさま機龍を操作した。

ここに、3式機龍とグロツシーナのタイマンバトルが始まつた。

ちなみに、そのころモンゴルでは……。

ダイゴ「え!? 駿河湾に怪獣が?!」

レナ「うん。さつき本部から連絡があつたの」

ダイゴ「それで隊長は何て?」

レナ「それが……。私達は調査任務を続行。

怪獣グロツシーナには3式機龍を中心みんなが

対処するつて」

ダイゴ「そうか……」

その事を聞くと、ダイゴは無意識に制服の上から胸、正確にはそこにしまわれたスパークレンスに手を当てるのだつた。

『シアン、そつちは頼んだぞ』

そう言つて、ダイゴは遙か彼方の空に目を向けるのだつた。
場所は戻つて駿河湾。

シアン『まずは……』

相手の出方を見る。そう考えた僕はスラスターを使つて
グロツシーナを基点に、反時計回りで12時の地点から
9時の地点、つまり奴の左側に回り込む。そこから更に
牽制のレールガンを叩き込む。

『ヒュヒュヒュンツ！』

『ガガガツ！』

『G I A A A A A N N !!』

数発のレールガンがグロツシーナの体に命中し火花を散らすが、
当のグロツシーナは大してダメージを受けた素振りも無く
機龍を睨みつけている。

『くつ!? やっぱりレールガンじやダメか!』

そう考えている内に、グロツシーナが咆哮と共に機龍
目掛けて突進してくる。

『機龍じや近接戦は分が悪い！ 距離を取つて、

メーサーで焼く！』

そう考えたシアンはレバーを操作し、スラスターを使って
機龍を背後へと大きくジャンプさせる。そして、着地に
合わせてすぐにメーサーを発射した。

『ビィイイイイイイイツ！』

黄色い稻妻のようなメーサーの光がグロツシーナの
胴体に命中する。

『G I A A A A A N N !? !?』

どうやらダメージが入ったのか、悲鳴のような声と共にグロツシーナが悶えるように体を震わせる。

アイナ「グロツシーナにダメージを確認！行けるよ
オオトリさん！」

シアン「了解……！こちらSS。新型兵装はグロツシーナに
対して有効の模様。このまま一気に畳みかけます」

ムナカタ『こちら2号了解。だが無茶はするな。MkIIが
あと数分で。俺達ももう少しで到着する』

シアン「了解」

僕は無線に答えつつ、目の前のモニター越しにグロツシーナを睨みつける。

メーサーは効く。だからこのまま……！

そう思い、もう一度トリガーを引こうとしたその時。

『G I A A A A N N !!』

『ババッ！』

グロツシーナの口から、赤い針状のエネルギーが多数。

まるでショットガンの散弾のように発射された。

『ドガガガツ！』

ユナ「イツタ～～～イ！！」

発射されたエネルギーの散弾が機龍の胸部装甲に命中して火花を散らす。

モニターの中でユナちゃんが涙目で痛そうにしている。

それを見た僕はすぐさまスラスターを使って機龍の体を縦横無尽に動かしたが……。

如何せん機械ＶＳ生物。反応速度で言えば奴の方が上。しかもここは足場の悪い水辺だ。

放たれる攻撃が機龍の体に当たる。更に……。

『ドガツ～バチバチッ！』

シアン「ツ!? レールガンユニット、強制排除！」

攻撃が左腕のレールガンに命中し、火花を散らす。僕はすぐにスイッチを押してユニットを爆碎ボルトで強制的に切り離す。火花を散らしながら海面に落下するユニット。僕はスラスターを使つて機龍をすぐにその場から横へとスライドさせる。

その刹那。

『カツ！ドオオオオンッ！』

海水を打ち上げるよう、レールガンユニットが爆発する。
これで武器は、右手のレールガンと口のメーサーだけだ。
と、その時。

ユウヒ「させないつ！」

『ビシュビシュビシュツ!!』

『ガガガアアアンッ！』

『G I A A A A A N N ?!』

横合いからレーザーの雨が降り注ぎ、グロツシーナの体に
命中した。それに気づいてレーダーに目を向けると、外洋から
こちらに戻ってくるMkIIの機影を捉えた。

シアン「ユウヒ隊員！」

ユウヒ「すみません。遅くなりました。私も攻撃に参加します！」
よし。これで機龍に、SS、MkIIが揃つた！それに
もうすぐ2号も到着する！そうすれば、デキサスビーム砲も
ある！

シアン「2号が到着次第、デキサスビームとメーサーの一斉射で
奴を倒します！それまで足止めをお願いします！」

ユ・ア「〔了解ッ〕」

僕の言葉に、ユウヒ隊員とヤシロ隊員が頷く。
よし！このまま行ければ！

『ビュツ！』

唐突に奴が体を回転させ尻尾で薙ぎ払いをかけて来た。
その時は咄嗟の事で反応できなかつた。

『グルグルツ！』

そして、僕が反応するよりも先に尻尾の先が機龍の首に
巻き付いた。
と、次の瞬間。

『バチバチバチッ!!』

ユナ「きやあああああああつ!!!」

アイナ「ツ!?雷撃!?!」

シアン「ユナちゃん！」

コクピットから見ていたヤシロ隊員とモニターで叫ぶユナちゃんを

見ていた僕がほぼ同時に叫ぶ。

そして、尻尾の先が離れた時、機龍が体のあちこちから煙を吹き出しつつ、姿勢が下がる。その様子を見て、咄嗟に機龍を下がらせようと僕はレバーを操作するが……。

「くっ!? 動かない!?

ユナ 「し、システムがオーバーヒートしてるう。

動けない!」

画面の中でユナちゃんが呻いている。まさか、今の電気攻撃で……。

その時、グロツシーナは動かなくなつた機龍を見ると、踵を返して海岸線の方へと歩みを進めた。

アイナ 「ツ!? グロツシーナ、方向転換して海岸部へと

移動を開始しました! オオトリさん! 機龍は!?

シアン 「ダメです! 機体各部がオーバーヒートしていく……!

駆動系も一部応答なし! ユナちゃん! そつちから

復旧できないかな!?

ユナ「む、無理だよー！今のままじや、頭動かすくらいしか

出来ないよー！」

そう言つて涙目のユナちゃん。

くつ！？このままじやグロツシーナが市街地に……。

どうする！？どうする！？どうする！？考えろ。考えろ！！

目を瞑り、必死に考える僕。

だが、僕に何ができる？SSを操縦している訳でもない。

機龍も動かない。2号だつてまだ……。

……こんな時、ウルトラマンティガさえ居てくれれば……。

そう、僕の中で心が呟いた。

だけど、僕はすぐに首を振つて、頬をパンと両手で叩いた。

居ない存在を頼つて何になるんだ。今、ここに居るのは

僕達GUTSだけなんだ！僕達しか戦えないんだ！

考え方！考え方！僕達がこれまで経験してきたこと全てを前提に考える！

僕達の今出来る最大火力は……。メーサーとデキサスビームの集中攻撃！これだ。

そう思つた僕はモニターを切り替え、今の機龍のメーサーで狙えるポイントを割り出した。

そして、その場所にポイントするとすぐにみんなとの通信を繋ぐ。

シアン「皆さん！ 聞いてください！ これから指定した場所のデータを送ります！ その地点までグロツシーナを誘導してください！」

アイナ「ゆ、誘導つて！ 怪獣を！？」

ユウヒ『何か策があるんですか！？』

前に座るヤシロ隊員と、グロツシーナを攻撃するユウヒ隊員の声が聞こえる。

シアン「確証はありませんが、奴を機龍の眼前におびき出し、

そこでメーサーと2号のデキサスピーム砲を撃ち込みます。

これが僕が考えられる、今の僕達に出来る最大火力です」

ムナカタ『……今はそれしかない、か。隊長』

イルマ『ええ。聞こえていたわ。ティガの現れる様子が無い以上、

今は我々が人々を護るしかない。みんな、出来るわね？』

6人「――「はいっ！」――」

イルマ隊長の言葉に、僕達が頷く。

シアン「ヤシロ隊員、ユウヒ隊員！二人はグロツシーナを攻撃して何とか奴を指定したポイントに誘導してください！2号、そちらはどうですか！？」

ムナカタ『心配するな！後数分で着く！』

シアン「了解。二人とも、お願ひします」

ア・ユ「了解っ！」

僕の考えた作戦に従い、MkIIとSSがグロツシーナに攻撃を仕掛けた。

『ドドドドドドッ！』

『ビシュビシュッ！』

『ドガガアアアンッ！』

『G I A A A A A N N ? ! ?』

攻撃を背中に食らい、悲鳴を上げて振り返るグロツシーナ。

奴はMkIIとSSに注意を向け、攻撃態勢に入った。

シアン「ショットガン！来ます！」

僕がガンカメラでその予備動作に気付いて声を飛ばす。

2機が横へのロール回転を行い、寸での所で攻撃を回避した。

そのまま、何とか奴を目標地点へと誘導する。

じわじわと、MkIIを追いかけて歩みを進めるグロツシーナ。

更に……。

ムナカタ『こちら2号、目標地点に到達。いつでも行けるぞ』
グロツシーナの背後に回り込んだ2号が、既にデキサスビーム砲を
準備していた。

シアン「よし。ここまで……。ユナちゃん。メーサーは行ける?」

僕はもう一度ユナちゃんに声を掛けた。

ユナ「行けるよ!さつきの仕返し!百倍にして返して

やるんだから!」

と、画面の中で鼻息も荒くしているユナちゃん。

よし、これで後は……。

シアン「目標!指定ポイントまで後60!55……50……45」

静かに、僕がカウントを刻む。上手く行ってくれ、と僕は

頭の中で祈る。

冷や汗が顎を伝う。

「25……20……15……」

他のみんなも固唾を飲んで待機している。

「10……5……0！今です！」

シンジヨウ『デキサスビーム！発射！』

シアン『メーサー砲！発射!!』

次の瞬間、僕とシンジヨウ隊員がほぼ同時にトリガーを引いた。

『ビシュウウウウウツ！』

『ビイイイイイツ!!』

発射された二つの光線。それは……。

『ドガアアアアアアンツ!!!』

見事にグロツシーナの腹と背中に命中した。

『G I A A A A A A N N ?!』

そして、グロツシーナが悲鳴の!のような叫びを上げ、そして倒れた。

『ザツパアアアアアアンツ！』

水しぶきを上げながら倒れるグロツシーナ。そして、奴は……。

『G I 、 G I A A A A ……』

体のあちこちから血を流しつつ、這う這うの体で外洋へと去つて行つた。

それを、しばし茫然と見送る僕達。

シアン「逃げ、た？」

アイナ「見たいですね」

しばらく滯空していた僕達。と、そこへ。

イルマ『みんな、ご苦労様』

本部の隊長から通信が届いた。

『怪獣グロツシーナは逃がしてしまつたみたいだけど、市街地への侵攻を水際で抑えられただけでも上出来よ。よくやつたわ』

シアン「は、はい」

と、その時の僕はまだ少し、呆然としていた。

理由としてはまあ、何とかティガ無しでも怪獣を

撃退できたからだ。

その後、結局僕はダイブハンガーに戻るまで、少し呆然としていた。でも……。

帰つてくる時に見えた何気ない街の景色を見た時、
僕は何かを護れた気がして、少しだけ嬉しい気持ちになつた。

第3・5話 END

エピソード4 『天秤』

「前回までのあらすじ」

ダイゴとレナがゴルザ調査のためにモンゴルへと向かつた。そんな中でシアンは軍隊のようになつていく現状に何処か迷いを感じていたが、ユナの一言で吹つ切れるのだつた。そんな中、駿河湾に怪獣グロツシーナが迫つているとの報告が入つた。

ダイゴがティガである事など知らないGUTSのメンバーは機龍を中心とした布陣でこれを迎撃。ティガの力無しで、初めて怪獣を撃退するのだつた。

僕達がグロツシーナを撃退してから、かなりの時間が経つた。そんな中で、僕達の話題の中心になつてゐる事件があつた。

木製探査に向かつたジュピター3号という探査船が消息不明

のまま、既に2か月が立っていた。

シアン「……ジュピター3号の行方は依然として不明。
捜査は引き続き行われる予定である、か」

そんな中、僕は司令室でPCを使つた作業をしていた中、
ネットニュースの一覧からその話題を見ていた。

aina 「まだ見つからないんですね、ジュピター3号」
そんな僕の隣に、ヤシロ隊員がお茶を入れたカップを
置いてくれた。

ユウヒ 「既に連絡が途絶してから2か月。何等かの
トラブルがあつたんでしょうか？」

そして更に、僕のPCの画面のニュース記事を覗き込む
ユウヒ隊員。

シアン 「唯單に通信機器にトラブルがあつて連絡が
出来ないだけなのか、或いは……」

と、僕達がそんな話をしていた時だつた。

『ビーツ！・ビーツ！』

シアン 「警報！？」

イルマ 「どうしたの!?」

ヤズミ 「大変です！先ほどTPCのレーダーが地球外から飛来する物体をキヤツチしました！」

ユウヒ 「飛行物体!?隕石ですか!?」

ヤズミ 「いえ、そこまでは何とも……」

と、会話をしていると定時パトロールに出ていたダイゴ隊員達の方から通信が届いた。

ダイゴ 『こちらガッツウイング1号、本部、応答願います!』

イルマ 「こちら本部」

ダイゴ 『隊長、謎の飛行物体を発見しました!』

イルマ 「こちらもモニターしているわ。その物体が

何か確認できる?』

ダイゴ 『現在高度2万メートル、マツハ4の速度で急速

降下中です。航空機にしては巨大すぎます』

ユウヒ 「航空機ではないとする、衛星?」

ヤズミ 「いえ、それにしても大きすぎます」

ユウヒ隊員の声に、基地の方のレーダーで確認していた

ヤズミ隊員が即座に否定する。

イルマ「到達予想地点は？」

ダイゴ『このままだと……。鹿島灘付近だと思われます』

鹿島灘？その辺って確か！

レナ「確かにそこには、宇宙開発局の施設があつたはずよ」

ホリイ「そうや！次世代恒星間口ケツト用に開発中の

高純度エネルギーの備蓄基地です」

シアン「ちよつ！ちよつと待つてください！そんなのが

もし間違つて周囲に漏れだしたら……！」

ホリイ「最悪、辺り一帯が吹つ飛ぶで！」

アイナ「そんなっ！」

僕達は、その最悪の事態を想定して顔を青ざめさせる。

イルマ「ここは……。ムナカタ副長以下、レナ隊員、

ホリイ隊員は2号で現場へ。オオトリ、ヤシロ

両名はSSで。ユウヒ隊員もMKIIに搭乗後

直ちに現場へ！何としても被害を最小限に

食い止めるの！」

6人「「「「「了解ッ！」」」」

そして、僕達はそれぞれの機体に搭乗し、浮上した
ダイブハンガーから発進した。

1号に遅れて僕たちが到着した時、驚いた。

シアン「あれって!?」

アイナ「怪獣!?」

施設に上陸したそれは、間違ひ無く怪獣だつた。
そこへ。

ムナカタ『各機に通達する。これから我々全機で

奴の前方から一斉攻撃をする』

ア・ユ・ダ・レ「「「了解ッ！」」」

2号に乗つていたムナカタ副長の命令に従い、
1号、2号、MkII、SSが怪獣の前方に回り込む。
ムナカタ「攻撃開始っ！」

レナ「発射！」

ダイゴ「発射！」

ユウヒ「撃ちます！」

アイナ「一斉射！」

『『ビシユビシユツ！』』

『バババババババツ！』

1号、2号、MkIIのレーザーが火を噴き、

SSもバルカン砲を齊射する。

しかしそれでも怪獣は止まらずに、施設のプラントを

破壊していく。

そして、奴は……。

シアン「ツ!? 敵怪獣、プラント内部の高純度

エネルギーを吸収しています！」

ガンカメラで奴の動きを観察していると、奴が

破壊されたプラントの中にあつたタンクに両腕を

突き刺し、エネルギーを吸収する。

と、その時プラント周囲の施設が稼働して奴を

囮つた。

「あれって……」

アイナ「多分、施設を守るための防衛設備ですね。」

これで動きが止まつてくれれば……

周囲を旋回しながら様子をうかがつていた僕たち。
と、その時。

『ビカツ！』

シアン「光つたつ!?」

奴の目が瞬いたかと思うと、稼働していたシールドが
消滅してしまった。

そして、そのまま怪獣はプラントの破壊を再開する。

ダイゴ「クソオ！怪獣め！」

ユウヒ「これ以上はやらせません！」

その時、背後から接近した1号とMkIIのレーザー
攻撃が怪獣の背面を焼く。更に旋回した2機の

ミサイル攻撃が命中。

しかし、攻撃を受けた怪獣は両腕を左右に広げると、
体から白煙を吹き出しつつ飛行して逃走していく。
シアン「……。本部、敵怪獣は逃走。施設の損害は

大規模なれど、エネルギー漏れ等の心配は

ありません」

奴が逃げていったのを確認し、僕が本部に報告する。
イルマ『こちら本部了解。それと、交戦後で悪いけど、
みんなはそこに降りて所長の人と話を』

シアン『こここの局長さんと？なぜですか？』
イルマ『先ほど、敵怪獣の攻撃で施設の防衛設備で
あるDCSが停止したのは見ていたわね？
どうしてもそれが気になつて』

シアン『なるほど。分かりました』

その後、僕たちは4機を着陸させ、DCSの
管制室へと足を運んでいた。

今は、僕のPDIを有線でDCSのコントロール
システムに接続。ユナちゃんにシステム内部の精査を
行つて貰っている。

ユナ『うううん』

シアン『どうユナちゃん。何か分かつた？』

ユナ『うん、分かつたには分かつたよ。システムが

停止する直前、外部からアクセスした形跡があるね。それもハッキングじやなくて、正規のIDでパスして、システム権限をオーバーライドして強制的に止めるね』

ムナカタ「正規のIDだと? 誰だ?」

ユナ『ううん、分かってるのはアクセスした時間とIDの持ち主だけだね。名前は……。』

ドクター・エザキ、この人だね』

エザキ博士、か。……あれ!? その名前つて確か!』

アイナ「ま、待つてユナちゃん! 確かエザキ博士つて……!」

局長「はい。あの人は現在、ジュピター3号と共に、

行方不明です』

局長さんの言葉に、僕たち全員が絶句する。

結局、それくらいしか事実は分からずに僕たちはダイブハンガーに帰還した。

シアン「行方不明のジュピター3号の搭乗しているはずのエザキ博士。怪獣の侵攻と同時に、

博士のIDでハッキングされ停止したDCS。

……頭がこんがらがつてきました」

アイナ「そうですね。……それに、あの怪獣も現在行方をくらませています。飛行能力を持つとなると、移動範囲も広いでしようし……。

しばらくは、また警戒態勢ですね」

シアン「はい」

そんな話をしながら、僕たちはダイブハンガーに帰還した。

お昼時、僕はヤシロ隊員、ユウヒ隊員と一緒に食堂で食事をしていた。

しかし……。気になる問題は尽きない。

現在地球には居ないはずの博士のIDを使つて行われたDCSへのアクセス。でも、誰が？あれを停止して得をしたのは？あの怪獣？

「あゝもゝ」

アイナ「オオトリさん、どうかしたんですか？」

シアン「いえ、あの一件が一体どういうわけなのか、
分からなくて……」

ユウヒ「確かに。分からない事が多すぎますね。」

怪獣の事と言い、DCSのアクセスと言い」
シ・ア・ユ「〔〔ハア〕〕」

そして、その謎を前に僕たちはため息をついた。

そんな中、しばらくしてある情報が入ってきた。

それは、消息不明の3人が、『家族の前に姿を現した』、
と言う物だつた。

その日僕たちが司令室に集まつている時。シンジヨウ
隊員が入つてきた。

シンジヨウ「隊長。宇宙開発局の連中がジュピター3号の

家族達を嗅ぎ回つてゐるのは本当なんですか?!」
入つてくるなり、少し気が立つてゐる様にも見える

シンジヨウ隊員。

ムナカタ「おい、何熱くなつてんだ。ん?」

シンジヨウ「あの怪獣、ジュピター3号と密接な関係が

あるんじゃないんですか?」

シンジヨウ隊員が問いかけるが、イルマ隊長は何も言わない。

「隊長!」

イルマ「ジュピター3号の件は、宇宙開発局の管轄なのよ」

シンジヨウ「なら直に掛け合ってきます……！」

そう言つて出て行こうとするシンジヨウ隊員。

イルマ「待ちなさい！」

しかし、声を上げてそれを阻止する隊長。

「彼らには彼らの。我々には我々のやり方があるわ。互いの領分を踏み越える事は

絶対に出来ないルールなの！」

結局、シンジヨウ隊員は何も言わずに、悔しそうに表情を歪めながら司令室を出て行つてしまつた。それを追うように、無言で出て行くダイゴ隊員。

シアン「……シンジヨウ隊員、何だかいつにも増して

気が立っていますね』

ムナカタ「……まあ、無理も無い」

シアン「ムナカタ副長、それって……？」

出口を見つめ、呟いた僕の言葉に副長が答え、僕は聞き返した。

ムナカタ「あいつは元アストロノーツ、宇宙飛行士だ。
仲間を何人も失ったと聞いた事がある。

今回の件も、それに通ずる物だ。何か、

思う所があるんだろう』

アイナ「そうちつたんですか。……何だか、頭の中が

こんがらがつた毛糸玉みたいです。色々な事が

あつて、怪獣とか、居ないはずの人が現れたり

ユウヒ「……いつだつて、生きると言う事は複雑だと

思います。仕事や人間関係。いつだつて

物事が上手いく事なんて事はありません』

二人の会話に、僕を始めみんな黙り込む。

けれど、それでも……。

シアン「どれだけ世の中が複雑でも、今この世界で戦える力を持つてるのは、僕たちだけです。だから、僕たちには人々を守れる力がある。違いますか？」

ムナカタ「……そうだな。そこは間違い無い。俺たちには、戦う力と義務がある」

アイナ「そうですね。私達は私達に出来る事で、人々を守りましょう」

ユウヒ「はい」

そうだ。僕たちが戦わなければならぬ。力無き、人々を守るために。

その後、カシムラ博士が司令室にやつてきた。

理由は、あの戦闘によつて怪獣の体から剥離した皮膚片の解析結果を伝える物だつた。

カシムラ「現場から発見されたこの怪獣の破片を分析した

結果、ジュピター3号の外壁の一部が発見されたわ」

イルマ「すると、ジュピター3号のアストロノーツ達は……」

ナハラ「あの怪獣に襲われたか、或いはそれ以前に不慮の事故に遭遇したか」

置かれた欠片を前に、ナハラ参謀や隊長が呟く。

シアン「じゃあ、彼らの安否は……」

イルマ「残念だけど、3人の生還は絶望視せざるを得ないわね」
苦々しい表情を浮かべながら呟く隊長。そのことに
みんなが俯き掛けた時。

ヤズミ「やつた！ついに突き止めたぞ！」

不意に、オペレーター席に座っていたヤズミ隊員が
呟く。

アイナ「ど、どうしたんですか？」

ヤズミ「エザキ博士ほどの人物なら何かメッセージを
残しているに違いない。そう思って、

コンピューターをしらみつぶしに当たつて

居たら」

ホリイ「あつたんか!?」

ヤズミ「ええ。エザキ博士の研究室の施設コンピューター

から見つけました」

イルマ「流石。我がGUTSの頭脳だわ」

シアン「流石ですヤズミ隊員」

ヤズミ「い、いやあそれほどでも」

こうして、僕達は次へと続く手がかりを見つけた。

そして、僕たちはモニターに映し出されたエザキ博士の動画から事の顛末を聞いた。

博士たち3人を乗せたジュピター3号は木星の衛星軌道付近で謎の光球に襲撃を受けた事。逃げようとするが追いつかれ、ジュピター3号諸共光球に取り込まれてしまつた事。取り込まれ、変異した3号があの怪獣である事。

怪獣には、感情もなく、ただエネルギーを求めて彷徨う事。そして奴が次に目を付けたのが、地球だつたと言う事。

やがて、画像が乱れていき、そして動画は途切れた。

イルマ「何とか、彼らを元に戻す方法はないかしら?」

カシムラ「……」

隊長の言葉に、博士は無言になつてしまふ。

何も言わない、と言う事は、その方法が思いつかない
と言う事なのかもしれない。そこへ。

ムナカタ 「謎はある。怪獣の虜であるはずの彼らが、
なぜ姿を現したかだ」

確かに。

ダイゴ 「多分、ピュアな家族や肉親への慕情のような物を

怪獣が理解出来ずに、彼らの意識が怪獣の能力を
借りて実体化したんじゃないんですか？」

シアン 「……どうしても」

と、僕が呟くとみんなが僕の方を向く。

「彼らを、助ける事が出来るのでしょうか？」

あの怪獣と融合しているのなら、それを

引き剥がすにしろ、方法も何も分かつては

居ないんですよ？」

僕の言葉に、みんな黙り込む。

ナハラ 「……この通信は既にTPC本部でも解析中だ。

間もなくその回答が出る

と、その時。

『PLLPLL!』

司令室の通信回線がコール音を鳴らし、ムナカタ副長が出る。

『PIPPIPPIP!』

更に中央テーブルにあつた電話回線が鳴り、それをナハラ参謀が取る。

何だか、嫌な予感がした。そして、それは当たってしまった。

ムナカタ「隊長、怪獣が鶴ヶ崎発電所を狙つて現れました！」伝えられたのは、あの怪獣出現の報だった。

僕たちが驚く中、ナハラ参謀も受話器を置く。

ナハラ「怪獣を倒せと言う命令が正式に下つた」

イルマ「……分かりました」

静かに頷く隊長。でも、その判断に納得出来ない人が居た。

シンジヨウ「参謀！我々GUTSは彼らと戦うん

ですか!?」

ナハラ 「我々が戦うのは、地球の平和を脅かす宇宙怪獣だ！」

シンジヨウ 「しかしつ!!」

ユウヒ 「シンジヨウ隊員、割り切れないのなら、ここに

残るべきです」

未だに食つてかかるうとするシンジヨウ隊員の肩に、
ユウヒ隊員が静かに手を置き咳く。

「我々が戦わなければ、彼ら3人以上の被害が
出ます」

シンジヨウ 「なら博士達は死んでも良いのか!?」

ユウヒ 「……そうです」

シンジヨウ隊員の言葉に、ユウヒ隊員が静かに頷き、
他のみんなが絶句する。

「私達には、天秤に掛けられた両方を救う力はない。

大勢の市民か、博士達3人か。

あの3人の生還の方法を探すために、一般

市民を危険に晒すのか。それとも、あの3人

諸共怪獣を倒す覚悟で臨むのか。

私は、後者を選びます」

シアン「ユウヒ隊員」

彼女の毅然とした態度に、みんな何も言えなくなる。

ムナカタ「ここで語つっていても始まらない！」

GUTS出動！」

「「「「了解っ！」」」

副長の言葉で、僕たちは司令室を飛び出した。

1号、2号、MkII、SSがダイブハンガーから飛び出していく。今回、グロツシーナとの戦いで損傷した3式機龍はオーバーホール中で生憎出動不可能だった。

ムナカタ『鶴ヶ崎発電所は関東一連の電力の60%を供給している。もし破壊されたら、都市機能は完全に麻痺してしまうだろう。

良いか！怪獣を必ず倒すんだ！』

通信機越しに、副長の命令が聞こえてくる。

シアン「……博士達は、助けられないのかな？」

aina「……。もし、助けられるのなら、私も
助けたいです。でも、私達が躊躇つて
いる内に大勢の人々が危険に晒される
のなら……」

シアン「そうですね。……今戦えるのは、僕たち
だけなんだ」

今は、悩むのも後悔するのも後だ。今は目の前の
怪獣をどうにかするんだ。

『ピピピッ』

シアン「ツ。レーダーに感あり。……敵怪獣もカメラで
視認しました」

レーダーが怪獣の姿を捉え、ガンカメラを操作して
怪獣へと目を向ける。

「発電所までは後10キロ程度。怪獣の

進行速度を考えれば、5分もあれば発電所に
到達します」

ムナカタ『よし、発電所を背にして怪獣に攻撃を
加えるんだ。奴を鶴ヶ崎発電所まで
行かせるな！』

「「「「了解っ！」」」

副長の言葉に領き、僕たちは攻撃を開始する。
1号、2号、Mk IIがレーザーによる攻撃を、
更にSSがバルカン砲を掃射しつつ怪獣の脇をすり抜け
上昇する。

シアン「攻撃命中。しかし効果は不明。以前発電所へ
向けて進行中」

ダイゴ「この～～！」

ガンカメラで怪獣の様子を見ながら報告する僕。
すると背後を取った1号がミサイルを撃ち込む。
それにダメージを受けたのか怪獣の注意が1号に向く。
向く。が……。

シアン「ツ！敵怪獣内部でエネルギー値が上昇！
1号、避けて下さい！狙われています！」

しかし、僕の言葉が届くのと、敵怪獣が両腕を合わせた先から水色の雷撃状の光線を放つのはほんどうタイミングだつた。

『ビビビビツ！』

『ボオオオオンツ！』

光線が1号の機関部を掠め、機関部から炎と煙が上がる。そして怪獣は自分の近くを落ちていく1号に視線を向けるが……。

ユウヒ「お前の相手は私達だ！」

『ビシュビシユツ！』

そこへ、直上からレーザーを頭に浴びせるMkII。それによつて怪獣がひるむ中、不時着する1号。

僕は急いで1号へガンカメラをズームさせた。

見ると、ハツチが開いて中からダイゴ隊員と彼に肩を貸して貰う形でシンジヨウ隊員が現れた。

良かった！

シアン「1号、撃墜されましたが二人は無事です！」
ホリイ「よつしやあ、ならこっちに集中出来るつて
もんやあ！」

そして、僕とヤシロ隊員のSS、ユウヒ隊員のMkII、
レナ隊員達の2号が断続的な連係攻撃で何とか
怪獣の動きを止めていた。

シアン「命中！しかし……ダメです！どの攻撃も
決定打に掛けています！」

ホリイ「クツソ～～！こうなつたら一か八か、
デキサスビーム砲を～！」

と、その時。

『デュワ！』

光が瞬き、ウルトラマンティガが現れた。

シアン「あ！ティガです！ウルトラマンティガが

現れました！」

驚き、叫ぶ僕。そんな中でティガは怪獣と戦い始める。

ムナカタ「来てくれたか。よし、俺たちは墜落した

1号の二人を助けに行く。SSおよびMKIIは
ウルトラマンティガを援護！』

レ・ユ・ア「〔「了解っ！」〕」

副長の命令で2号が少し離れた所に着地。

残った僕たちのSSとMKIIが周囲を旋回しながら
攻撃を繰り返し、ティガを援護する。

『シ～～～！ハアッ！』

そして、ティガがタイプチエンジを行い、赤い姿へと
変わる。

攻撃を受け、ひっくり返つた怪獣の背に馬乗りになり
攻撃を加えるティガ。しかし背面のスラスターから
吹き出した白煙がティガを吹き飛ばす。

ティガは更に光線技を放つが……。

シアン「くつ！ 撃破出来なかつたか！」

怪獣の強固な鎧は、ガクマを一撃で倒したあの
光線技でも撃破しきれず、逆に怪獣が反撃の
レーザーを撃ちまくる。

それがティガの胸に命中し、のけぞるティガ。
そこから次第にティガが押され出した。

「このままじゃティガが！」

アイナ「こちらSSS！ティガを援護します！」

ユウヒ『私もっ！』

怪獣の背面に回り込んだSSSとMKIIがレーザーと
バルカン砲を放つ。しかしそれは怪獣の背中に
着弾し火花を散らしただけで、こちらに注意を
向ける事さえ出来なかつた。

シアン「ダメかっ!?」

こちらの攻撃は、一切効かない。しかもティガの胸の
タイマーが鳴り出した。もう時間が無い。

……僕が、内心諦め掛けた時。

ユウヒ『諦めてはダメです！ここで私達が退けば、

鶴ヶ崎発電所が！』

ツ！ そうだ。ここで退くわけには行かない！

シアン「もう一度、奴に攻撃を！」

アイナ「ツ！待つて下さい！怪獣の様子が！？」
僕が叫ぼうとした時、前に居たヤシロ隊員の声が聞こえてきた。

慌ててガンカメラを怪獣に向けると、怪獣がもがき苦しむように震えだした。

シアン「あれは……!?」

シンジヨウ『あれは、エザキ博士達3人のおかげだ。

本部から、ジュピター3号内部の
コンピューターに3人の家族の写真を
送っている！それが彼らを呼び覚ました
んだ！』

通信機から、シンジヨウ隊員の声が聞こえてくる。
あれは、3人のアストロノーツが起こした奇跡、
なのか？

ただ、僕は呆然ともだえ苦しむ怪獣を見ている事しか出来なかつた。
そして、ついに怪獣が動きを止める。

その体から、三つの光球を排出しながら。

怪獣の様子を見ていたティガが、体色を変え
トリコロールのバランスタイプになる。

『デュワッ！』

そして、放たれた白い光線が、怪獣の体に命中し、
怪獣は白煙と共に地に伏し、爆発した。

シアン「……勝った」

それを見ていた僕が小さく呟く。

しかし、その内に喜びは沸いてこなかつた。

ダイゴ隊員達は、怪獣から離れ空へと上つていく
光を見上げていた。でも……。

シアン「僕たちは、あの3人を救えたのでしょうか？」

アイナ「……どうして、そう思うんですか？」

シアン「もし、僕たちにもつと力があるのなら、

3人を、残された家族に合わせる事だつて
出来たかもしれない」

そうだ。彼らには家族が居た。でも、もう二度と

会う事は出来ないかもしいれないと。

僕たちに、もつと、力があつたのなら……。
そう思うと、僕はやるせなさからギュッと手を組み合わせる。

そして……。僕の目から涙が溢れ出す。

僕は、彼らも助けたかつた。でも、出来なかつた。
ユナ「シアン、泣いてるの？」

俯く僕を見て、ガンカメラのモニターに映つた
ユナちゃんの声が聞こえる。

シアン「僕は、強くなりたい。もつと、誰かを
守れるように。こんな事が、二度と

起こらないように」

僕は、嗚咽を押し殺しながら呟く。

アイナ「……なれますよ。私達は強く。

今日よりも、ずっとずっと」

前のシートに座るヤシロ隊員の優しい声色に
励まされた僕は、ゴシゴシと涙を拭う。

そうだ。僕達が立ち止まつてゐる訳には
行かない……！

明日を、そして、人々を守るために！
これからも、僕は戦う。一人の犠牲だつて、
出しはしないために！

第4話 END

エピソード5 怪獣V S 戦略

（前回までのあらすじ）

木星探査船、ジュピター3号が消息を絶つて3ヶ月。そんなとき地球外から謎の飛行物体が落下してきた。落下物、怪獣は鹿島灘のエネルギー・プラントを襲撃する。そんな中、消息不明だつた3号のパイロット達が家族の元に現れると言う不可思議な現象が発生する。そして、その中の一人、エザキ博士の残したデータから、怪獣の正体が元々ジュピター3号である事などが判明し、パイロット3名が内部に捕えられている事を知る。そして、GUTSの面々はティガと共に怪獣を倒すのだつた。

それは、ある日の朝の事だつた。

シアン「ふ、ああ～～」

僕は欠伸をしながら朝食を取るために食堂に向かう。

そして、食堂で朝食を取つて空いている場所を探していると……。

アイナ「お～い、オオトリさん！」

近くにいたヤシロ隊員が僕に手を振つている。側にはユウヒ隊員の姿もあり、僕は二人のお隣の席にお邪魔した。

「オオトリさんも今から朝食ですか？」

シアン「はい。そう言うお二人も？」

ユウヒ「ええ。朝食堂の外でばつたりと

出会つたので、一緒に」

と言う訳で、僕はヤシロ隊員、ユウヒ隊員と一緒に朝食を取つていた。

ちなみに僕の朝食は焼き鮭定食。

ああ～。暖かいご飯と味噌汁が寝起きの体に沁みるな～。

……平和だな～。こんな時間が続けば良いのにな～。

『ビイイイイツ！ビイイイイツ！』

放送 「GUTS隊員に連絡！繰り返す！

GUTS隊員に連絡！全隊員は

至急司令室に出頭せよ！」

……。フラグつてあるんだなあやつぱり。

シアン「も～～！朝ご飯くらい、ゆつくり食べさせてよ～！」

僕は思いつきり叫びながら、残っていたご飯と鮭と味噌汁をすぐさま平らげると、ヤシロ隊員たちと一緒に司令室に向かつた。

「失礼します！」

そして私達が司令室に向かうと、そこには隊長やダイゴ隊員たちが既に待っていた。

イルマ「おはよう3人とも。早速で悪いけど、
これを見て」

そう言つて隊長は大型スクリーンに目を向け、
僕達もそれに続く。

アナウンサー「えへ、引き続きお伝えします。

昨夜遅く、静岡県北川市の海岸
に巨大な生物の死体が打ち

上げられたとの事です」

アナウンサーが喋つてゐる傍らでは、その
巨大な生物、怪獣が海岸に打ち上げられてゐる
のを、ヘリから撮影してゐる映像が流れていった。
シアン「これつて、怪獣ですよね」

アイナ「ですね」

イルマ「そうよ。そして、我々GUTSの
この怪獣を調査せよとの命令が
下つたわ。現場には、シンジヨウ、
ホリイ隊員の2名に向かつて貰い、

他は何かあつた時の為に待機を

ホ・シ 「「了解っ！」」

二人は頷くと、ヘルメットを手に司令部を
出て行つた。

その後、僕たちは司令室で待機と言う事になつた。のだけど……。

シアン 「……」

僕はパソコンの画面をずっと見つめていた。
その時。

アイナ 「オオトリ隊員? どうかしたんですか?」

シアン 「あつ。いえ、ちょっとと」

不意にヤシロ隊員に声をかけられた僕は、
少しだけ驚いた後、パソコンの画面に
目を向け、ヤシロ隊員もそれに続いた。

アイナ 「これつて、テレビの?」

シアン 「はい。元々テレビがいろいろ放送
していたんで見てたんですけど、

ちよつと……

今はちょうど、町行く人々へのインタビューを放送していた。

しかしその内容は、はつきり言つて嬉しい物ではなかつた。

怪獣が世界各地に出現しているというのに、不謹慎にも笑つてインタビューに答える男性。容易く、GUTSにもつと頑張つてほしい、早く倒してほしいと呟く女性。

「クソ……！」

僕は、怒りを感じてパソコンの画面を閉じた。

特に、あの女性の方だ。

もつと頑張れ、早く倒してほしいと、

他人事のようにそんな事を言うあの人に、GUTSの人間として僕は怒りを覚えた。

「何も知らないいくせに、

勝手に……！」

アイナ「オオトリさん」

僕が怒り心頭になつて拳を握りしめていた時、
ヤシロ隊員が僕の右手をやさしく
包み込んでくれた。

シアン「つ。す、すみません。

怒りで我を忘れて……」

あんな事で取り乱してしまった自分が恥ずかし
くて、僕は俯いてしまう。

アイナ「今は準備機中ですし、少しだけお茶
でも飲みに行きましょう。リラックス
すれば、嫌な事なんて忘れちゃいますよ。ね？」

シアン「……。はい」

ユウヒ「あの。でしたら私も一緒にして良いですか？」

アイナ「あ。良いですよ。3人でお茶しましょう」

と言う事で、僕たち3人は食堂へ行き、

それぞれが紅茶や緑茶でお茶をしている。

ちなみに僕とユウヒ隊員は緑茶。ヤシロ隊員は紅茶だつた。

シアン「…はあ」

お茶を飲み、僕は気分を落ち着ける。

aina 「どうですか？落ち着きました？」

シアン「はい。おかげ様で。……少し気持ち

が落ち着いてきました」

aina 「そうですか。……それにしても、

私もオオトリさんの後ろから

インタビューの動画を見てました

けど、何というか、人々の怪獣

に対する認識が甘く感じられますね」

シアン「……。はい」

人々の怪獣に対する認識は、どこか甘く感じられた。皆、そこまでの恐怖を感じているようには見えなかつた。怪獣という恐怖を知らない。

それは幸せな事かもしねれない。けど同時に

それがとても危ういように、僕は思ってしまう。
ユウヒ「知らないと言う、幸福と。

知らないと言う、危険性。

それは幸福であると同時に、

人々の無知を物語っています」

シアン「……。ままなりませんね。どちらも」

ユウヒ「はい。しかし、お二人には反感を

持たれてしまうかもしだせんが、
だからこそ、人々は幸せと言える
でしょう。圧倒的な力の化身である

怪獣の恐怖を知らないと言う事は、
それ自体が幸福だと私は考えて居ます」

アイナ「確かに、そうかもしませんね」
シアン「……」

二人の言う事も分かる。けど、僕には
どうしても納得出来なかつた。GUTSの
努力も知らずに好き勝手言う、あの入達が。

その時だつた。

放送『GUTSのオオトリ隊員と
ヤシロ隊員に通達。至急司令室まで
来られたり。繰り返します……』

アナウンスが流れた。それは僕達を呼ぶ物だつた。
シアン「招集？どうして？」

アイナ「とにかく、司令室へ」

シアン「あ、そうですね。急がないと」

立ち上がつたオオトリ隊員に続いて

僕も立ち上がり、司令室に向かう彼女に
続いて、足早に食堂を後にして。

シ・ア「失礼します」

僕達が司令室に入ると、そこにはムナカタ
副長とイルマ隊長がいただけだつた。

ムナカタ「来たな？早速で悪いが、二人は
すぐにSSで怪獣の死骸がある

北川市に向かつてくれ」

シアン「僕達がですか？理由を聞いても？」

ムナカタ「実は、先ほどTPC上層部の決定での怪獣の焼却処分が決定した」

アイナ「随分急な決定ですね」

ムナカタ「地元住民からの苦情と、死骸による海洋汚染を防ぐためだ。怪獣

の死骸はブースターを搭載した

ウイング2号で懸架。外洋まで

運び、そこで焼却処分を行う。

二人はSSに搭乗し、2号のレナ

を1号のダイゴと共にサポート

してくれ。それと、2号は

ブースター装着の関係から武装

を取り外している。万が一の時は2号の護衛を頼む。二人は既

にハンガーに向かつた。お前達

もすぐに出撃の用意を」

シ・ア 「〔了解つ〕」

ムナカタ副長からの指示を受け、僕達はヘルメットを片手に格納庫に向かう。

すぐさま格納庫でSSに乗り込み、システムを立ち上げていく。

シアン「スラスター正常。システムオールグリーン。発進準備完了」

アイナ「了解。ガツツウイングSS、発進！」

ダイブハンガーから出撃したSSは、先に出撃していた1号と2号に追いつき、北川市へと向かう。

そんな中で……。

アイナ「怪獣の死骸、か」

シアン「ん？ ヤシロ隊員、どうかしました？」

ポツリと、前に座っていたヤシロ隊員の咳きが気になつて声を掛けた。

アイナ「ああ、うん。……少し、胸騒ぎが

するんです。何事も無ければ良いんですけど

と呟くヤシロ隊員。しかし、改めて考えると僕も少し嫌な予感がしてきた。

シアン「確かに。何事も無ければ良いですね」
彼女の言葉に同意するように、僕も小さく呟いた。

その後、現場へと到着した僕達。ガンカメラで周囲を見回せば、規制線のすぐ外に多くの報道関係者が集まっていた。

現場の即席司令部には、ダイブハンガーからムナカタ副長が来ており、ムナカタ副長の開始の合図によって、怪獣の死骸の、運搬作業が開始された。

2号から下ろされた重機運搬用の装備、アルチハンドが4本のアンカーを射出。
それが怪獣の体に突き刺さると、ゆっくり

と2号と怪獣が上昇し始めた。
だが……。

『ズバツ!!』

怪獣の皮膚が破け、茶色に物体が周囲にまき散らされてしまつた。

かと思うと、アンカーが怪獣の体から抜け、2号は勢い余つて上昇。怪獣の死骸は少し持ち上がりつただけで再び地面に叩き付けられてしまつた。

アイナ「し、失敗？」

シアン「どうやら、怪獣の体が予想以上に柔らかかつたようですね」

この方法じゃダメだか。

と、僕がそう考えたその時。

『ビーッ・ビーッ!!』

レーダーが突然アラートを鳴らした。
慌ててレーダーを確認すると……。

「ツ!? 全員に緊急連絡!」

僕はすぐさま無線をオープンにして、
基地や周囲に皆に回線を開いた。

「目標、活動を開始しました!」

僕が叫んだ次の瞬間。

『グウオオオオオオツ!!』

怪獣が立ち上がり、咆哮を上げる。

レナ「死んでたんじやなかつたの!?」

すると無線機から、レナ隊員の戸惑いと怒り
の混じった声が聞こえる。

シアン「現在も生体反応は検知できません!

どうなつてるんだ……! あれじや、

まるでリビングデッドじやないか!」

アイナ「……ゾンビ怪獣、ですか」

僕の叫びに、ポツリと呟くヤシロ隊員。

一方の奴は、僕達を無視して海岸線沿い
に北へ向かっていく。

シアン「目標、北へ向かつて移動を開始」

僕は通信機を使つて皆に情報を伝える。

ムナカタ「このまま進むと……」

副長の声を聞いた僕は、すぐに周辺地図のデータをモニターに呼び出し、進行方向を確認してみるけど……。ツ！

ホリイ「液化天然ガスのタンクです」

地図に上には、第3コンビナートの文字が！
このままじゃ不味い！

ムナカタ「シンジヨウ、ダイゴ。

フォーメーションアタックを
掛ける。1・1・2だ。

HEATをスタンバイ。奴の進路
を変えろ。アイナ達は二機を
バツクアッपしつつ

目標の監視を行え

シンジヨウ「シンジヨウ了解」

ダイゴ 「ダイゴ了解」

シアン 「こちらSS、了解」

僕達のSSは、怪獣の頭上を旋回しながらその様子を観察。シンジヨウ隊員とダイゴ隊員の1号が正面から怪獣に向かっていく。

時間差で放たれた、合計4発の対戦車榴弾、HEAT。それが真っ直ぐ怪獣の腹部に向かつて行く。

そして、命中。

だが……。

シンジヨウ 「やつたか!?」

シアン 「いえつ！ HEAT全弾命中するも起爆

せず！ 弾頭はそのまま怪獣の体内に、

取り込まれました」

ガンカメラで見ていた僕は、状況を報告する。

一応、奴の目標を変える事には成功した。

「進路の変更には成功。しかし

目標は以前健在です』

ムナカタ『分かつた。……進路が変わった
だけでも良しとする。各機はその
まま目標の監視を続行。何か
あつたら知らせてくれ』

シアン『了解』

通信機越しに聞こえるムナカタ副長の声に
頷き、僕は視線をガンカメラのモニターに
移した。

「……相変わらず、生体反応は無し。

あれは、生物なのか?」

アイナ『考へてもしかたありませんよ』

ポツリと呟いた僕の言葉に答えてくれる
ヤシロ隊員。

「人間の常識が通じないのが怪獣

ですから』

シアン『……そう、ですね』

『僕達は、怪獣の事を何も知らない。

いや、僕達『でさえ』と言うべきか。だつたら尚更、市民は怪獣について何も知らない。それを前にした時の恐怖なんかも……』

ふと、今朝見たテレビの様子が僕の脳裏をよぎるのだつた。

僕はある時抱いた怒りを振り払うように頭を振ると監視任務に戻つた。

ムナカタ『シアン、これから座標206・190

にある養殖場に目標を誘導する。

目標がその養殖場に到達するまで

あとどれくらい掛かりそうだ?』

シアン「待つて下さい。この距離と今の

アイツの移動速度からして……。

早くてもでも2時間は掛かります!』

ムナカタ『よし。SSの燃料はどうだ?』

シアン「まだまだ残っています。現在の残量は74%。帰投の為の燃料を考えてもあと2時間程度は飛べます」

ムナカタ『よし。お前達はそのまま目標の監視を続行。もう少ししたら基地から

ユウヒのMKIIを発進させ監視任務を交代させる。それまで目標から目を離すなよ』

シアン「了解です。ガツツウイングSS、監視任務を継続します」

僕は通信機を切ると、ガンカメラで怪獣の監視を開始する。

それについても、何故養殖場？ムナカタ

副長は何を考えているんだろう？

そう考へながら僕達は監視任務を続行した。

怪獣は、僕達の事を気に留めた様子もなくただただ進んでいく。

とは言え、相手は怪獣だ。どんな攻撃手段を持つてるか分からぬ。警戒は怠らないようにしないと……。

ガンカメラで奴の通過した箇所をスキヤンするが、酷いの一言に尽きた。

汚染物質が周囲にまき散らされている。
もし、こんな奴が都市部に侵入して
暴れでもしたら……。

仮に倒す事が出来たとしても、汚染物質の除去だけでどれだけの時間が掛かる事か。
何とか、奴の都市部侵入だけは避けないと、そんな事を考えてながらも飛行を
続けていると、目標地点である養殖場が
見えてきた。

「ん？」

けど、よく見ると、その養殖場へダイゴ
隊員のガツツウイング1号が何か、

光る物を散布している。
あれは……。

「レーダー攪乱用のチャフ？」

何だつてあんな物を？」

アイナ 「あれはレーダーを妨害する物
ですよね？ あれで一体、何を
する気なんでしょうか」

どうやらアイナ隊員も目的が分からぬ様子
で首をかしげている。

そうこうしている内に奴が養殖場へと足を
踏み入れた。すると直後、シンジヨウ
隊員の1号が、高周波ジエネレーターを
奴に照射し始めた。そしてそこまで来て
僕は副隊長の作戦を理解した。

シアン 「そとか！ 電子レンジだ！ アルミの
ジャマーが高周波を反射して、
奴の体を乾かす！ H E A T を

受け止める柔らかい体が無くなれば、

後はもう一度H E A Tを打ち込んで

吹き飛ばす事が出来る！」

アイナ「成程！」

副隊長の咄嗟に作戦に、僕は感心していた。

これだけの短時間でこんな作戦を

思いつくなんて、ムナカタ副長は凄い、と

内心賞賛していた。

そして奴は、副長の読み通り熱に弱いのか、
ついにその場で膝を突いた。

よしつ！このままっ！

と、僕が内心思つていた時。

ムナカタ「シンジヨウ！アイナ！離れる！

早く上昇するんだっ！」

シアン「えっ!?」

アイナ「緊急離脱っ！」

突然の命令に驚く僕と、咄嗟にスロットル

とレバーを捻つてSSをその場から離すヤシロ隊員。

直後。

『ボトボトッ！』

シアン「つ!? あれはさつきのHEAT!?」

奴の胴体から、先ほど二機の1号が打ち込んだ合計4本のHEAT弾頭が姿を見せた。直後、弾頭は養殖場に落ちた。そして……。

『『ドドオオオオオオオーンッ!!!』』

爆音が周囲に響き渡り、爆炎が奴を覆い隠した。

……出来る事なら、この爆発でくたばつて欲しい、と僕は願つた。

しかし、その願いも空しく、奴は爆炎の中から姿を見せ、右腕に付いていた残り火を右手で払うと、再び侵攻を開始した。

シアン「くつ、目標、侵攻を再開しました」

ムナカタ「ああ。……SSは一旦基地に戻れ。

燃料がそろそろ尽きる頃だろう」

アイナ「……了解。ガツツウイングSS。

一時帰投します」

悔しさを滲ませる僕とヤシロ隊員。

そして僕達を乗せていたSSは確かにもう

燃料が残り少ない。

僕達は、後ろ髪を引かれる思いでその場から後退し、ハンガーへと戻つていった。

そしてハンガーに向かう途中、通信が聞こえてきた。

ムナカタ『ヤズミ、怪獣の細胞の引火温度は!?』

引火温度?副長、どうしてそんな事を?

まさか怪獣を燃やすつもりなのかな?

ヤズミ『えーっと。……1000度あれば

燃えるはずです』

ムナカタ『《はず》ではダメだ！』

どうやら副長は細かいデータが欲しいらしい。
だつたら……。

シアン「なら、SSがスキャンした奴の

データを送ります。あと、

ユナちゃん聞こえる？ 出来たら

ヤズミ隊員を手伝つてあげて！」

ユナ『了解！ ヤズミを手伝うよ！』

ヤズミ『お願ひユナちゃん！ これから

すぐにデータを元に追証を

行いますが、恐らく間違い無いと
思われます！』

イルマ『副隊長！ 怪獣が市街地に入るまで

あと一時間！ それまでには絶対

けりを付けないと！』

あと、1時間か。その時間は、長いようで
短い。人にとっては1時間を長いと

感じるかもしれないが、作戦を展開すると
なると、1時間という時間は短い。
と、その時。

シアン「あつ」

レーダーに反応があつた。前方から
接近する機体があつた。それは
ダイブハンガーから発進した
ユウヒ隊員のMKIIだ。

僕は咄嗟にMKIIに通信を繋いだ。

「ユウヒ隊員」

ユウヒ『オオトリ隊員。何か?』

シアン「いえ。大した事ではないのですが、
奴の体について未知の部分が多い
のが現状ですから、どんな攻撃を
してくるか分かりません。奴の
行動には十分注意して下さい」

ユウヒ『ご忠告、ありがとうございます。』

では、失礼します』

シアン「はい。……お気を付けて』

そして僕が通信を切るとSSとMkIIが交差した。

僕はガンカメラで遠ざかつていくMkIIの後ろ姿を見つめていた。

その後、基地に帰投した僕達はSSの燃料補給が行われている間、カシムラ博士の所へと向かった。

今、ムナカタ副隊長の指示の元、液化天然ガスを使った作戦が進行中だけど、投入出来る戦力は多い方が良いと思つての行動だ。

シアン「カシムラ博士！3式機龍の出動は出来ないんですか!? 確か、もうすでにオーバーホールは終了してましたよね!?」

カシムラ 「確かに機龍の整備は終わっているわ。

でも機龍の出動にはTPC上層部の許可がいるの。上はかなり渋つてるわね。前の海岸での戦いで、色々オーバーホールしたけど、結構費用が掛かつちやつてね。それで及び腰になつてるのよ」

シアン 「そんなん!? 今人々が危険に晒されてるのに、そんなお金の事なんて！」

カシムラ 「まあそう思うのも無理はないけど、それが組織つて物なのよ。昔、人々の税金で軍隊動かして、

世論で政権が叩かれた、なんてよくある事だつたわ。同じ

ように、GUTSも無闇やたらに怪獣と戦うだけじゃダメつて事なんでしょう？」

そう言つてため息をつくカシムラ博士に、
僕は何も言えなくなつてしまつた。

結局、僕はハンガーのSSへと戻つた。

そこへ戻ると、ヤシロ隊員が待つていた。

アイナ「どうでした？機龍の方は？」

シアン「ダメ、でした。上の許可が無いと

発進させられないって」

アイナ「そうですか」

僕達は2人揃つて肩を落とす。

けど、いつまでもこうしてゐるわけには
いかない。

見たところ補給は終わつてゐる様子だ。

シアン「とにかく、今は前線に戻りましよう。

もうすぐ奴が市街地に到達する頃

です」

アイナ「そうね」

と言う事で僕達はハンガーを出発し、すぐに

前線へと戻った。

その道中で改めて作戦を聞くと、副隊長は液化天然ガスのタンクをガツツウイング2号のアルチハンドで持ち上げ、それを使って奴を焼き払うつもりらしい。

既にダイゴ隊員とレナ隊員が乗る2号機が天然ガスをつり上げに、ガス会社から提供されたタンクを取りに向かっている。

一方の僕達は奴の監視を言い渡され、奴の所へと向かった。

時間帯はすでに夕暮れ時。僕達が奴に追いついた時。すでに奴の向かう先には街が見え始めていた。

このままだと、あと20分もしないで怪獣が

市街地に到達してしまう。

ムナカタ『シンジヨウ、ユウヒ。奴の足を止めろ』

シンジヨウ『了解。ナバームを使います』

ユウヒ『了解。続きます』

するとそれは副長も分かっていたのか、指示を受けたシンジヨウ隊員の1号とユウヒ隊員の1号MkIIが太陽を背に怪獣に接近。奴は日の光が眩しいのか腕を上げて影を作るが、遅い。

『ドドオオオオオオオンツ！』

発射されたナーバームが奴の足下で炸裂し奴を転倒させた。

しかしそれも精々数十秒の時間稼ぎが関の山だつた。奴は何事も無かつたかのように立ち上がつた。その時。

ヤズミ『リーダー、ヤズミです』

基地のヤズミ隊員から通信が届いた。

『怪獣の組織は、液化天然ガスの

燃焼温度で十分に焼き払えます』

ムナカタ『よしつ。レナ、慎重に怪獣の

真上へ』

レナ『了解』

ムナカタ『シアン、アイナは奴の動きを監視。何かあればレナ達に

伝えろ』

シアン「こちらシアン了解。目標の監視

を継続します」

僕はガンカメラを動かし、奴の様子を確認する。

奴はゆっくりと高度を下げる2号に吊り下げられているタンクを見上げるだけで、特に動こうとはしていない。
……このままなら行けるか？

『ヌウッ！』

何と、奴の首が伸びた！？

「目標の首がつ！2号退避してつ！」

咄嗟に通信機に向かつて叫ぶが、遅かつた。

奴が2号のアルチハンドのワイヤーに

食いついたのだ。そのまま奴は首を戻す

が、歯に絡まつたワイヤーは外れず、

怪獣はタンクを抱えている。

でもこのままじや2号が不味い。

そう思つていた時。

「ツ！ウルトラマンティガ！」

ガンカメラが、どこからともなく現れた

ウルトラマンティガの姿を捉えた。

ティガはその手から青白い斬撃波を放つてワイサーを切断。

レナ隊員の2号は後退していく。

これでよしつ。

そう思つた時だつた。

アイナ「あつ!? 怪獣がつ!？」

シアン「えっ!?」

驚くヤシロ隊員の声に僕自身も驚きながら
ガンカメラを怪獣に向ける。

すると、あろう事か奴はその腹の中に
タンクを埋めてしまつた。

アイナ「なっ!? タンクまでっ!?」

シアン「そんなっ!? どうなつてるんだ

アイツの体っ!?」

驚く僕たちだが、怪獣はそんな事お構いなし
にウルトラマンティガへ突進していく。

ティガは最初、一気に光線を放とうとポーズ
を取つた、が……。

ムナカタ『クソッ、爆破させちや不味いんだ』

その時通信機から聞こえた副隊長の声。

すると何故かティガは光線の構えを解き、
徒手空拳の構えに戻つた。

もしかして、シンジヨウ副隊長の声が

聞こえていたのか？

そんな疑問も余所に、ティガはパンチやキック、巴投げなどで怪獣を何度も何度も倒すが、その度に起き上がりつてくる怪獣。そして、ティガがキックを決めた瞬間。

『ズボッ！』

何とティガの足が怪獣の体にめり込んでしまった！

足を抜こうと藻掻くティガだが、怪獣は口から黄色いガスを放つてティガを翻弄。何とか足が抜けたティガだが、反動で後ろに倒れてしまった。

そこに体ごとのし掛かる怪獣。

あのままじゃ不味いっ！

シアン「ヤシロ隊員！」

アイナ「分かつてる！SS、ティガを援護

します！」

ユウヒ「私もっ！」

怪獣の背中にSSのバルカン砲とMkIIのレーザーが突き刺さるが、怪獣はものともしない。

何とか離れた所を起き上がるティガ。だが今度は、怪獣はティガの頭を掴んで自分の腹に押しつけ始めた！まさかティガまで取り込む気か！

アイナ「させないっ！」

ユウヒ「これならばっ！」

そこに、今度は怪獣の両肩を狙つてバルカン砲とビームが突き刺さる。すると、怪獣の拘束が僅かに緩んだ。シアン「今だっ！ティガっ！」

僕は咄嗟に叫んだ。スピーカーを通して僕の声が響いた直後。

ウルトラマンティガの両手が光に包まれ……。

『タアツ!!』

怪獣が大きく吹き飛んだ。

ティガの力で一気に数百メートルは押し飛ばされる怪獣。

だが、ティガの胸の光が明滅を始めた。もうすぐティガの限界だ。

僕がそう思っていると、ティガは先ほど中断した光線のポーズを取る。

どうやら今度は撃つ気らしい。
ムナカタ「全機！もつと離れろ！それと

消火弾用意つ！」

アイナ「了解つ！」

ユウヒ「はいっ！」

万が一に備えて僕達が消火弾を用意する中、ティガの放った光線が怪獣の腹部に命中する。
が……。

シアン「き、効いてないのか?」

怪獣は再びティガに向かつて歩き出した。だがティガは静かに見守るだけで構える事もしていない。

まさかダメだったのか?僕がそう思つた時だつた。

ふと、怪獣の足取りが次第に遅くなり、完全に停止した。かと思つた次の瞬間、その体が内側から爆ぜ、怪獣は消滅した。シアン「……目標、完全に消滅を確認」

僕は通信機から本部に連絡を入れた。と、同時にウルトラマンティガもどこかへ飛び去っていく。

イルマ『皆、ご苦労様。怪獣の街への侵入と言う最悪の事態は避けられたわ。各機は帰投してちようだい』

シアン「SS了解」

本部のイルマ隊長からの帰還指示が出た為、僕達のSSや1号、2号、MkIIは夕暮れの空の下、ダイブハンガーへと戻つていつた。

翌日。ニュースの時間帯ともなれば話題は昨日の怪獣騒ぎについて。テレビでは専門家を名乗る男がGUTSの対応に問題ありだとか偉そうな事を言つていた。見ていても気分が悪くなりそうだつたので、それを変えるためにネットの新聞記事を見ていたのだけど……。

シアン「あっ」

ある一文が僕の目を引いた。それは……。

『怪獣災害が頻発するこの苦境の中で、我々が一つ幸運と言えるのは優れた戦略家を擁するGUTSが、我々を守つていると言う事である。一市民

として、感謝を捧げたいと思う』

「……こんな風に思つてくれる人達もいたのか」

一文に目を向けながら、僕はポツリと呟く。
確かに、人によつては無責任な事を言うかも
しない。でも、それが全てじやない。

見るとそのページのコメント欄に、その
一文に賛成するようなコメントを書いて
くれている人もいる。

そう思うと、不思議と心が温まるのを
感じた。そして……。

「よしつ、今日も頑張るか」

その一文でやる気が出た僕は、今日も
頑張ろうと意気込むのだつた。